
賢者を継ぐもの...のはず。

フラフラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

賢者を継ぐもの…のはず。

【Nコード】

N7810X

【作者名】

フラフラ

【あらすじ】

ある時突然異世界に迷い込んだ青年。

バランス悪いにも程があるステータスと知識を引っさげて、今日も頑張って生きてゆく。

世界の全てを知る大賢者となるために…

主人公は基本戦えません。但し畏ならはれるかも。マッドサイエントティスト入ってます。

現在改稿作業中です。とくに、作品前半は大幅に追記するつもりですので、一度読まれた方もどうぞ。

終わらせるつもりだったのですが、皆様のご声援をいただきましたので更新再開しようと思います。チキンの作者がびっくりするような数のご感想をいただき、本当にありがとうございます。

…ただ、更新速度は下がる可能性があります。再開の詳細は最新話として投稿します。

プロローグ ああわかってたさ。現実には甘く無い。(前書き)

初めまして。フラフラと申します。

小説初投稿です。

名前の通り移り気なもので亀更新が予想されますが、よろしければ暇つぶしにでも使ってください。

プロローグ ああわかってたさ。現実には甘く無い。

この世界は風が強い。

凍てつくような風が容赦なく俺を襲う。

だが、そんな風にもすっかり慣れてしまった俺は特に何とも思わずに自分の住みかへと足早に歩いて行く。

「…うわっ、本当に寒みーな今日。」

訂正しておこう、慣れても寒いものは寒い。

まして、辺りはゴロゴロと岩が転がっているだけの殺風景な景色である。

ああ…霧まで出てきた…

「ただいま〜っど。」

声を出しながら我が家に潜り込むが返事は無い。

いやまあ一人暮らしのボロ小屋で返事があったらあつたで怖いが。

この小屋は、俺がこの世界に来て見つけたボロ小屋を補修して(と)いっても大したことは出来なかったが(使っているものだ。

雨風を凌ぐ我が家としてありがたく棲ませて貰っている。

最初は余りのボロさに引いたが、まあなんだ、住めば都である。

そう、《この世界》。

俺は約二年前にこの世界にやってきた。

やってきたというか気づいたらいたのだが。

もともと地元の大学に通う貧乏学生だった俺は、《とばされた》その日も生活費のためにバイト先に向かっていた。

もちろん、徒歩だ。

…自転車は少し前にパンクしたきり放ってある。直すの面倒くさいし。

あの日もまた今日のように強い風が吹いていた事を覚えている。

強風ってのは徒歩の敵だな。

寒さをこらえて（手袋忘れた）急ぎ足でバイト先に向かっていった俺だったが、運悪く赤になったら長い事で有名な信号に引っかかり、仕方ないのでその日の予定を携帯で確認する事にした。

バイトのシフトを確認し、暇つぶしに適当に携帯をいじくりまわす。

しばらくたち、ようやく車が行き交う騒音がやんだので歩きだそうと思って顔を上げると……そこには荒涼とした岩の楽園。

…正直、理不尽にも程がある。

しばらく（半日はかかった。今考えると結構壮大なしばらくだ）茫然自失だった俺だが、
なんとか我に帰り、現状整理を始めた。

ここはどこだ？

不明、辺り一面岩だらけだ。

何でここにいる？

不明、気づいたらいた。

俺はどうするべき？

不明、ってか現状何もかもが不明。

……参ったなあ。

さっきまで長時間呆然としていた後遺症か、何だか現実感が薄い。

自分でも自分が混乱しすぎてわけわからん状態にあるのが自覚できる。

何かきっかけがあれば、一瞬でパニックに移行する状態であることも、だ。

何だかわからんがとりあえず帰ろう。

…あれ？どうやって帰るんだ？

それじゃバイト先に事情を話して…あれ？電波が無いぞここ。

どこだよここ。

どこだよ。

俺はどこにいるんだよ。

膝に力が入らない。

手が震えて、呼吸が浅く早くなる。

辺り一面を改めて見渡す。

広がるは寒々しく荒涼とした景色。

…冗談じゃない。

「……………せよ。」

知らず、俺の口から音が漏れた。

「……………えせ！」

自分の意志に逆らい、勝手に震えてへたり込む身体と。

完全なパニックに陥り、答えのない同じ問いを何かに向けて発し続ける俺と。

それら全てを他人事のように捉えている俺がいた。

「……………帰せよお！…！」

食料は意外となんとかあった。

俺が《出現》したのは岩の大地の中心であり、しばらく歩けば植物も姿を見せ始めた。

植物があれば、それを食料とする虫もいた。

食べられそうなものは全て食べた。

岩の大地に転がっていた動物の白骨が、俺の死への恐怖をかき立てた。

水は近くにあった池から飲んだ。

そうやって、なんだかんだで生き抜いていた。

二年間、だ。

ん？説明が足りない？

いや、何とか生存の目処が立つまでの慌てまくりで情緒不安定の俺

の話なんかつまらんし。

…ぶっちゃけ恥ずいんです。

今でこそ独りでこの世界の果てみたいな場所に順応しているが、最初の一年なんてひどかった。

1日に一回は狂いかけたな。

ここがもといた世界と違うという事は割とすぐに納得した。

蛍光色のライトブルーの木なんてあってたまるか。

大体、空に太陽が2つ、月(?)が3つある時点でどうもこうもない。

この情報化社会のご時世に携帯の電波が「圏外」からさっぱり変化がない。

電波状況が悪い場所であろうと時々くらいは繋がるだろ、普通。

GPSも繋がる気配ないし。

ありとあらゆる情報を鑑みて、よくよく考えて出た結論は、あ、異世界だわ。というものだった。

まあ大した情報なんて持ってないけど。

人間、どうしようも無い事態に直面すると思いが止まるらしい。結論の出た俺はやたらとぼんやりしていた…と思う。

いや、こっちに来た当初にわめきすぎただけかもしれないのだが。

いまいち自信の無い言い方なのは、当時の記憶が曖昧なものだからどうにも詳しく思い出せないためだ。

毎日に変化なんて無いからな。

ただ一つハッキリ覚えているものは、何とかして生きてかなきゃなあ…という思考というか、当時の決意の断片だった。

プロローグ ああわかってたさ。現実には甘く無い。(後書き)

長い文章って難しいですね

一人は寂しいのです。(前書き)

長い文が書けないく!!
困ったなあ

一人は寂しいのです。

何だかんだでこの世界にやってきてから約二年が経過している。

二年もあれば俺にだって辺りを探検する勇気の一つも湧いてくる。

結果、ここは山の上だということが判明した。

確かにやたら寒いし霧も多いと思ってはいたが…山とはね。

食料は小屋の近くにある何だか知らないがやたら甘い匂いの果実と湖の魚、とこの水を中心とした数種類の食材でやりくりしている。

時々山を少しばかり下っては木の枝をこっそり拾って来て薪にしている。

ちなみに火種は一年半前の落雷である。

どう考えても発狂しそうに退屈な生活だが、最近は趣味を見つけた。

例のライトブルーの木だが、あれの葉っぱをすりつぶした液体と甘い匂いの実を混ぜると、非常に辛いペーストになる事を発見した。

このように、このあたりの植物や生物は混ぜると面白いことになる物が多く、俺は新たな発見を目指して日々調合に精をだしている。

…何か大学でも同じようなことしてたなあ。

出来上がったなかでも特に面白いのはひょうたんのような木の実にためてある。

最近数が増えてきて、ただでさえ狭い部屋のスペースを圧迫し始めて困るなあ。

俺が《この世界》に来て…ええい、いちいち言つのが面倒臭い！

異世暦三年目。

おお、かつこいいい！

…使っているのは俺だけという寂しい暦ではあるが。

ある日、俺は小屋の中の整理をすべく両手一杯にひょうたんもどきを抱えて部屋を出ようとしていた。

すると…

ドカンッ！！（足を壁に強打）

うおああ！！（悲鳴）

バツカーン！ゴロゴロ…

（壁を突き破ってどこかの空間に転げ落ちる）

いだだだだ…

両手一杯に物を持っていたら壁を蹴破ってしまった。

？壁を蹴破っても外に出るだけのはずなんだが……

とりあえずその疑問は後回しだ。

しかし、足下が見えないと危ないな。

今度からはもう少しずつ持とう。

まあ、壁の穴は後で塞いでおけば問題あるまい。

問題は、だ。この空間だよなあどーみても。

今まで二年住んでたけど初めてしった…

小屋の地下にはそこそこ広い地下室が存在していたようだ。

暗くて中の様子は解りづらいが、何やら大量の物が投げ出され、雑然とした空間である。

恐る恐る歩き出した俺の足が、三歩目にして何かに当たる。

コオンという澄んだ音が響いた。

これは…フラスコ？

かがみこんで拾い、眺めてみる。

うん、間違い無くフラスコである。

目を凝らすと部屋の四方は古臭いが立派な棚で埋められ、その上には所狭しと試験管やらビーカーやらの実験器具が並べられていた。

おいおいおい…何ですかこのマッドサイエンティストの部屋みたいなところ。

なんか液体が溜まったままになってる試験管も多いし…

あれ、でもこの実験器具群に俺の混ぜ合わせコレクションを入れれば…

…ニヤリ

フーハハハハハハハハハハ（以下ry

地下室を発見してから一週間、今日ものんびりと実験器具をいじって遊んでいた俺だったが、今日は妙なことに気づいた。

地下室の中心近くの床から返ってくる音がやたらと軽いのだ。

つま先でつついてみたり、寝転がってノックしたりしてみると、やはり軽くて少し響く。

床下収納でもあるのだろうか。

まじまじと床を眺めるが、古臭い木の板には怪しいものなんて…おや？

よく見ると、ごくごくかすかな隙間がある気がする。細かなおがくずや埃で解りづらくなっていたのだ。

一度隙間を認識してから見ると、なるほど50センチメートル平方ぐらいの四角い切れ目が走っている。

…ムフフ。お宝の匂いがしますぜ。

俺は意気揚々と木板を持ち上げ…降ろす。

…よく考えると、こんな薬品作りが趣味だったような前の家主が隠

したものだ。

危険物の可能性がある。

というか十中八九は危険な薬品だろう。

しかし…お宝である可能性も残るのだ。

なんてこつた、理性と好奇心の正面衝突だ。

ぐおおお、どうする俺!?

…いや、しかし俺は人間だ。人間は理性があるから人間なんだ。

考えててみれば、現状生きていくのには困ってないし、無理な冒険はすべきじゃないな。

うんうん。話は決まった。今回だけは冒険して、次からは自重しよう。

さっ、何が出るかな？

「本一冊かよ…」

古ぼけた本が一冊転がっていた。…俺の葛藤を返せ。

まあ、本は読むためのものだ。取りあえず表紙をめくる。

「以下の問に答えよ。」

問一、 2 5 8 6 × 3 2 3 3 + 2 9 5 8 - 3 3 4 1 × 1 2 8 …」

数学の問題集だった。…日本語かよ。

しかし答えよと言われれば答えようじゃないか!!

理系大学三年なめんなあ!!!

師匠(?)の手紙

…

……

……………

よしっ、解けたぞ全部。まさか問300まであるとは思わなかったけど。

ずっと地下室に缶詰めだったからもう時間の感覚が無い。

しかし改めて考えると…不毛な事したなあ…

得体のしれない脱力感にため息をついていると……

「……!! うおあ!?!」

突然本が光り出した。ひとりでに開かれると、パラパラとページがめくられていく。

「……あれ?」

よく見ると、問300のあったページの次に何枚か存在した白紙だったページに文字が浮かび上がっている。

「マジかよ……計算用紙かと思って色々書いちゃったよ……」

俺がそんな頭の悪さ全開のつぶやきを漏らしていると、文字の追加は終了したらしい。

本の放っていた光は消え、パタリと力無くページが閉じた。

恐る恐る追加された文章を読む。

ようやく現れた本文は、異常に腹が立つ内容だった。

やあ、この本を読んでいる平凡な人間よ。

僕は賢者ジブリール。

書面上とはいえこの僕に直々に名乗られたのだ、光栄に思いたまえよハッハッハッ！！

さて、あまり時間が無いから本題に入ろう。

君のような凡人にも理解出来るように易しく説明するからついてくるんだぞ。

今、僕は寿命を迎えようとしている。

勘違いするな！ この僕にかかれば不老薬など

逆立ちするより簡単に作れるが、そんなものに興味が無いだけだ。

死後の世界というものも非常に興味深いと思わないかい？

おおっと、話がそれたね。

とにかく僕はもうすぐこの世を離れる。

それ自体は初めての経験でワクワクしているが、ふと気づいたんだ。

この僕の天才的黄金の頭脳がこの世界から消えるのは、世界にとって大きすぎる損失だと。

そう、僕のこの素晴らしすぎる完全無欠の知識の数々が（以下自慢が続くのみなので略）

安心したまえ。天才たるこの僕に限って抜かりなどあるはずもない。僕の持つ天より高く冥界より深い魔法薬と調合薬の知識と経験の全ては魔力データ化されてこの本に蓄えられている。

その知識を脳に転写する魔法陣と共にだ。

しかーし！！

しかし、だ。この僕が蓄えた知識と経験がその価値すらわからないような愚物の手に渡るのは我慢ならん。

そういうわけで、この本の前半に記された難問（君たちにとっては、だが）を一度で全問正解した人間が手にした時のみこの本が魔導書として真価を發揮するようにしたのだ。

この文章を見る栄誉に恵まれた君は、そのまま僕の知識を受け継ぐ
栄誉も得たわけだ。

ありがたく受け取り、大いに感謝したまえ。

大賢者にして君の師となる天才、ジブリール・ワイズマン様。

追伸、知識を受け継いだら特別に大賢者ジブリールの弟子を名乗る
事を許そう。

何、礼はいらない。僕は君の師だからね。

…どんな自意識過剰だよ、こいつ。

だが、話の内容が本当なら、俺にとってこの本は何物にも勝る価値
を持つ宝となる。

俺は意を決すると、最終ページでほんやりと輝く不思議な円形の模
様の中心に額を押し付けた……

二代目賢者の誕生

脳が熱い。

脳を中心に全身をとてつもない激痛が荒れ狂う。

痛い。熱い。何も考えられない。

視界が真っ白だ。耳元で大音量の鐘でも鳴らされている気分。

痛い。痛い。痛い。

痛い。

い、た……

目を覚ますと、ボロい地下室の傷んだ天井が見えた。

頭がぼんやりする。

ゆっくりと起き上がって辺りを見よつと……

「いだだだだ！」

頭に激痛が走った。その痛みで覚醒する。

そつだ、俺はあの本から記憶を受け継ごうとして酷い目にあい気絶したんだ…よな？

いまいち自信が持てない。気絶したせいかな前後の記憶が曖昧だ。

俺はぼんやりと前を見つめた。古ぼけた木製の棚の上の試験管にバジリスクの牙の猛毒が収められている。

……ん？

ちよつと待て、何であの液体を知り…ああ、なる程、これがあいつの言う天才の黄金の知識か。

しかし、凄いな。ざつと室内を見回してみると、ぎつしりと並べられた試験管やフラスコが次々に目に入るが、そのすべての薬品の名前や効能、特徴、入手先、調合の用途などの情報が頭に瞬時に浮かんでは消えてゆく。

あの男、ジブリールといったか。確かに天才を名乗るだけのことはあるようである。

もう少し穏やかに記憶をくれると更に見直したのだが。

突発的に再び襲って来た頭痛に顔をしかめるが、先のに比べればだいぶましだ。

受け取ったリターンに比べれば小さ過ぎる代償と言ってもいい。

俺の脳に転写された情報は、期待を大きく越えて素晴らしいものだった。

ただ、余りの情報量についていけそうにないなあ…

しばらくは記憶を頼りに実際に薬品を触って

いろいろ慣らしていく事にしよう。

ムフフ。夢が広がるねえ。

二代目賢者の誕生（後書き）

ようやく主人公が主人公になりました。

師匠の餞別(?)

「よし、終わったな。」

俺が記憶を受け継ぎ、二代目賢者を襲名してからおよそ2ヶ月。

ようやく地下室の薬品の整理と確認が終わろうとしていた。

「いよーし、知識もだいぶ自分の物に出来たし、そろそろ山から降りてみるかなあ。」

「ふむ、聞こえているかな我が唯一の弟子にして知識を継ぐものよ。」

「!?!? のわっ!?!?!」

知らないおっさんの声に慌てて振り向くが…

「誰も…? 一体どこから…」

「君の頭の中、詳しく言えば記憶をつかさどる部分から君の意識に直接干渉している。」

記憶…? ということはこの声は

「そう、僕のこの声、この音声記録は君が受け継いだ知識群の中に紛れこませた物だ。」

「君が僕の溜め込んだ薬品を一通り確認した場合にのみこの音声記

録が自動再生されるように仕込んでおいた。」

「いくら僕の知識を受け継いだといっても、いきなり僕になれる筈もない。しっかり記憶を使いこなす努力をしてこそ僕の弟子だ。」

おお。あの自過剰がそれっぽい事を。

「君は僕の知識を継いだ。それはつまりその知識を使って更に薬品を知り、将来的には僕を超える賢者となる義務を負ったと言うことだと知れ。」

「本があつた隠し収納は二重底だ。開けると《無限鞆》がある。昔、魔道具の名工に白金貨10枚で作らせた特別な鞆だ。空間的魔法で容量がとんでもない事になってる。ついでに出し入れ口とこの研究室がリンクしてる。つまりこの部屋にある物は鞆からも取り出せると言うことだ。」

「僕の遺言はこんな所だ。…最後に一つ。」

「最初で最後の弟子の顔が見れ無なのが残念だ。…期待しているよ、我が弟子よ。」

「………任されました。師匠。」

さーて、いよいよ山を降りる事になったんだが…

「ハツハツ。…迷った。」

…山を甘く見ていたかもしれない。

生きる目的

「だーれかー。おーい。」

俺が初代賢者たる師匠を超えるために山を降りる決意を固めてから約4時間。

山を下り始めてからは3時間。

俺は…その…：…現在地がわからないというか、

あれそもそもマトモに山から降りようとした事あったっけというか

…

要約すると。

完全に遭難者の気分だった。

随分下ったはずなのに、辺りの景色は少しも変わったように見えな
いし、振り返ればさっきまで我が家だった山頂近くがすぐそこに見
えるし。

いい加減足が痛い。腹も減ってきた。

よしっ、休憩だ。

そうと決めればささっとその場に腰を下ろして《無限鞆》を開く。

名前も知らない木の実を適当に干した物をかじりつつ、鞆のもう少
し奥を探る。

「んー… あったあった。」

俺は鞆から一つの小瓶を引っ張り出した。

師匠特製の《ポーション》だ。

まあ、作り方は俺の受け継いだ知識にもしっかり残っており、ほぼ同一の物を生成出来るから賢者特製と言うべきかもしれないが。

「足に塗るのだ〜」

怪しげな歌を歌いながら自分の足に塗り込んでいく。薄い黄緑色の液体が足に塗られることにどんどん痛みが引いていく。

「おおお… さすがは師匠特製調合品。バカみたいにきくなあ。」

余談だが、あの最後のメッセージを聞いた俺は彼を師匠と呼ぶようにしている。この世界で生きていく術（知識）と目的（師匠に受け継いだ知識を更にどこまでも発展させること。）を貰ったのだ。俺の師匠と読んで差し支えないだろう。

…まあ、性格に難があるのは確かなようだが

そう、いつの間にかこの異世界に飛ばされ、

生存手段が確立されてからはなんとなく趣味があるくらいでぼんやりと生きていた俺も、

今は生きる目的を見つけていた。

すなわち、《師匠を越え、二代目賢者として胸をはれるようになる》と。

いつまでも貰い物の知識にすぎるだけなのは嫌だしな。ただでさえこの世界トップクラスの知識だ。どうせなら、更に大きく発展させて《俺の知識》にしたいだろ？

俺は、初めて家から遠出して3時間で遭難する男には不釣り合いかもしれない大きな目標を抱いて笑うのだった。

「やべ、一人でニヤニヤしてるとかはたから見たら危ない人だ。」

狂走からの邂逅

さて、生きる目的を再確認した俺だったが。

「うう…帰りたい…」

完全に心が折れていた…

～二時間前～

「あゝ、疲れた。もう歩きたくなっ、わっ、ちよっ、ぎゃあー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

濡れた岩で足を滑らした俺は、たまたま急斜面を歩いていた事もあり凄まじい勢いでとんでもない距離を転げ落ちた。

身体全身の擦り傷や打撲はすべてポーションで完治したものの、気分というか、テンションの急降下は治せなかった。

「あゝ、だるい重い（精神的に）疲れた〜。」

しかしまあ、気分だけで歩かない訳にもいかない。

ところで皆さんは、深夜テンションというものを経験した事があるだろうか？

非常に疲れていたり、眠かったりすると、何故か異常に気分が向上：つまりハイテンションになってしまふ現象だ。

ちょうど今、彼もまた似たような心理状態になってきていた。

「もう疲れた。歩きたくない。まだ山から出ないのかよ。もうこれ走って下りて下で休んだ方がらくじゃないか？よーし、そうしようかな。中途半端に走ったって意味ないよな。

全力疾走じゃなきゃあな。よっしゃあ！！走っしるぜ！！！！」

ズダダダダダ！！

明らかに危険な速度も気にしない。

だって、今の彼は深夜テンションだから。

お昼時の穏やかな日の光が差し込む森で、一人の少女が木の根もとに屈んでいた。

彼女は、かたまっで生えている草を丁寧に摘み取り持っている籠の中にしまっ。

しばらく木を移しては同じ作業をしていた彼女だが、何かに気づい

たかのようにふっと顔を上げる。

ほどなくすると、森の奥から妙に楽しそうな悲鳴が響いてきたのだ。
った。

「わああああー！」

俺は絶賛ハイテンションで山、というより森といった様子になってきた道（？）を駆け抜けていた。

全身くたくたで、特に今にも倒れそうなほど足が疲れている。

そんなとき。

高速で背後へ流れていく視界の片隅に彼女を認識出来たのは、奇跡
と言っていていいだろう。

「!?!? 人かつ!?!? とうあああ!?!」

無理やり足を止めたせいで、地面に顔からダイブする。

ズザザッと地面を削った俺は、既に立ち上がる体力を無くして
いた。

くたたりと転がっていると、何かが近寄ってくる気配。

「あの……大丈夫……ですか？」

ああ、久しぶりの生の人の声だ……

師匠の正体

恐る恐るかけられた声に、ゆつくりと顔を上げる。

目の前に立っていたのは一人の少女だった。

歳の頃は十三、四だろうか。短めの栗髪に可愛い顔立ちをした少女である。

腕には蔓草を編んだものと思われる籠を下げていた。

うん、80点。

いやー、やっぱり女の子は目の保養にいいなあ。

「あの、大丈夫…ですか？」

しばらくの間一人だったから評価が甘くなってるかもだけど、
（この世界で）初めての人間だしなあ。こんなものだよ。

「えっと、あの、大丈夫…」

うーん。しかし可愛いことだなあ。

ってあれ？なんか言ってる？

「あの、声聞こえています……か？」

「うん。ありがとう。」

「！！ えっと、大丈夫ですか？かなりの勢いで、その、倒れられたみたいだったので。」

「ん？ああ、心配ありがとう。大丈夫だよ」

俺は、鞆から再びポーションを取り出す。

「それは？」

少女はポーションを見たことがないようだ。

おかしいな、知識では割とポピュラーな魔法薬のはずだったんだけど……

「ん、ポーション。」

と、一言で答えて顔にかける。ついでに、肘や膝にもかけておいた。

「え？ポーションつてもつと濁った深緑の色をしていたはずじゃ……

…うわあ、も、もう傷が消えてる。」

え、そうなの？

「そうですね！…ポーションと言うのはもっとドロツとした濃い緑で、効果が出始めるまで30分はかかるはずですよ。」

知らなかった…さすが師匠特製調合品……

「あの、それってどうやって手に入れなされたんですか？」

いや、師匠が作った。

「…………お師匠様のお名前をうかがっても？」

確か…………ジブリール、だったか。

「…………ジブリール、大賢者ジブリール、ですか…………」

え、なに、しってんの？

「知らない方がおかしいでしょう。《魔薬の狂賢者》、《歩く危険薬品庫》、《最恐の魔薬医師》、彼の持つ危ない二つ名はまだまだたくさんありますよ…………」

へえ、もう少し教えてくれない？

「え？ええ構いませんけど、まあ、一番有名なのは《狂賢者》ジブ
リールだと思います」

なるほどなるほど。

…………師匠、あんた何者だったんだよ。

これが最後だ！！説明回！！（話はまだまだ続く）（前書き）

タイトルの通り今回は完全なる説明回ですが

、とりあえず次話から本編に入るので許して下さいな。

これが最後だ！！説明回！！（話はまだまだ続く）

俺がこの世界で初めて出会った80点の少女は「エリカ」と名乗った。

「え？じゃありヨウさんはあの《狂賢者》様のお弟子さんなんですか！？」

「ああ、まあ。そういう事になるな。」

「え、ええ？ど、どうしよう。あの、その、ご無礼をお許し下さい？」

「……はい？え、突然どうしたの？」

「はいっ。《狂賢者》様のお弟子様ともなればそのお立場は《三賢者》に準じるものとなられますと思いなさりま、あれ？思いまされ、思いま……」

「あゝ。いいよそんな無理なくて。というか《三賢者》って、何？」

「へ？」

その時のエリカの何言ってるんだコイツ、と雄弁に語った眼差しを俺は忘れられない。

「え？あの、だって《狂賢者》様のお弟子様なんじゃ……？」

う、まずい。……………仕方ない、ここは賭けにでてみるか。

「いや、俺つてもともと孤児らしくてさあ。

師匠に拾われて弟子になったんだけど、あの人は自分の知識と技術を伝える事にしか興味なくて……。一般常識が欠けてるんだよね、いろいろと。」

嘘は言っていない、はず。この世界に親はいないし、貰った知識も薬学だけだ。

「そうなんですか……。わかりました。《三賢者》についてですね。少し長くなると思いますが……」

「構わない。頼む。」

「はい！ ええと、《三賢者》の発祥は、今から約300年前だと言われています。当時この世界は大乱の時期で、あちこちの国が争っていました。私たちの国、《自由信仰王国イデア》あ、今いるこの国ですけど、世界唯一の信仰の自由を掲げていたために特に争いに巻き込まれたそうです。そこで当時の王、今の国王の五世代前なんですけど、その方が大陸の賢者三人に対等な人間として理想を語り協力を求めたと伝わっています。志に共感した彼らは王にその知恵をかし、見事王国は独立を守り抜きました。以来、王国最高の賢者三人を代替わりで選んで、彼らを《三賢者》と呼ぶんです。」

「……………壮大な話だな。」

「ええ、本当に。代々《三賢者》の方々には王と対等な地位と、様々な権利が与えられて

いるそうです。」

「ほう。そして俺の師匠であるジブルールもその《三賢者》の一人であつたわけだ。」

「はい。《狂賢者》の号を贈られていたそうです。ですが26年前に突如失踪して以来行方不明で、王国は彼の情報を掴んだ者に対して報告の義務をかしています。《三賢者》には、非常識なほどの知識や知恵が求められます。《狂賢者》様がいなくなつてから後任者はまだ見つかつてないそうです。」

「ふん。あれ、つてことは……」

「あ、はい。あなたのことも報告いたしますよ?」

エリカはにっこりと笑つた。

ドゥナドゥナ

「あー、すみません。」

「……」

「あー。」

「……」

「おーい、返事してよー」

「……うるさいぞ。静かにしろ。」

「はあ。そりゃあすみません。」

こんにちは、初めて名乗った気がするリョウ
・アズマです。全身鎧のいかついオッサン達と馬車に揺られていま
す。…尻は痛いし空気は重いし今すぐ逃げ出したい……

あれ？俺誰に話してるんだ？

まあ、いいや。余りの暗い空気に耐えきれなくなった俺は、この状
況を作り出したエリカの緩い笑顔を思い出してみる事にした。

(多分)三時間前、俺はエリカに連れられて山岳地帯を抜け出して
彼女の住む農村へとやってきていた。

「おおー。む、村だ、人だあー!!」

「…遭難者ですか、あなたは。」

まあ、世界規模で遭難者なわけだが。

「いや、俺つてもものごころついてから師匠以外の人間って見たことな…いや、知らないし」

この世界では

「そうなんですか。…大変だったんですね」

うん、君の想像以上に。考えてみたまえ、あの山の上の辺りの生活を。生えてる草だの木の実だの、よくわからん豆だの、キノコだの、芋っぽい塊だの…有機物と見れば何でも食べたなあ…二度と虫なんて口に入れたくない。まあ非常に貴重なタンパク源だったわけだが。

当時は怖かったけど、あの落雷には本当にお世話になった。火種が手に入るまではいつも小屋にあった毛布とマントが手放せなかったし、魚やら肉やらは食べられなかったもんなあ。…あの虫食い生活からの脱出には本気で号泣してしまった。

「ま、まあ俺の生活環境はどーでもいい。今はどこに向かっているのかな?」

「ふふつ。秘密です。リヨウさんは初めての村を楽しんで下さい。」

「……ちよつと不安だが進めに従おう。」

言葉通りあたりの観察をする。

ポツポツと少しずつ距離を置いて立つ家屋は
全てくたびれた木造建築で、大きさは大体で現代日本のプレハブ住
宅に近い。

全ての住宅が同じ見た目なのもその印象に拍車をかけている。

建物と土の道以外は全て畑になっている。

ああ、人が育てた野菜が食べたい。

現在の時刻は夕暮れ前で、農具を抱えて家路につく人が多いようだ。
何というか、農耕民族である日本人の原風景といった感じだなあ
などとノスタルジックな感慨にふけっている。

「リョウウさん、つきましたよ。」

「ああ、ありがとう……あ？」

目の前に、ガツチガチの金属製全身鎧に身を
包んだ、いかつい顔をした、兵士らしき人が
、槍を構えて、こつちを睨んでいませう。

こ、こえー！！

「え、エリカ！！僕を売ったんだね！？信じたのに

「……！」

「何をですか。というか別に悪い事してないでしょう。」

「はい？悪い事？」

「ここは王国騎士団辺境駐在地といって、この辺りの治安を守る王国騎士団の方々がおられる場所です。…まあ普通はありえ無いですけど平民が王家に報告する事がある場合にはここを通すんです。」

「なるほど、で？何だっただまた俺をここに連れてきたのさ？」

「さつきも言いましたけど、《狂賢者》様に

関する情報を手に入れた人間は王家に報告する義務を負うんです。」

「ほほう、王家への報告義務とはねえ。」

「異世界に来たって改めて感じるなあ。」

「……と、いうわけなんです。はい、見たこともないような高い効果のポーションも持ってましたし、信憑性があるかなと。」

「わかりました。ご苦労様でした。以後は我々が引き継ぎます。」

「あれ？エリカさん？」

「それではさようならリョウウさん。」

「爽やかにそういって、この世界で初めての知人は去っていった。」

「君、リヨウと言つらしいがついてきなさい
。本当に《狂賢者》様の弟子なのか確かめさせて貰おう。」

「へ？確かめる？」

「君も知っているだろう。いや、知らないのか？まあいい。上手く
《狂賢者》様の後釜と

して《三賢者》となれば大抵の事は思いのまま…でもないらしいが、
とにかくそう考える

者が結構いるらしくてな。自分は《狂賢者》
の弟子だとかたる奴が後を絶たんだ。」

「あー。つまり実力をもって自分が彼に関わる者だと証明しろっつ
ーことですか。」

「まあそういう事だ。」

「……薬学の実力ってどう証明するんだろ」

「……そりゃ確かにそうだな。」

「……。」

「……。」

「いや、騎士団の人。あんた試験する側でしょーが。」

「私は下っ端さ。重要案件に関わる事はないんだよ。」

「はあ、なかなかシビアな世界なんですねぇ、騎士団も。」

「そうだなあ。」

和んだ。

で。

肝心の試験の内容だったのだが。

よくわからん会議室みたいな部屋に連れて行かれ、正面に座った偉そうなヒゲにいきなり「君がかの《狂賢者》の弟子だと証明したまえ。」っていわれた。

いやいや、無茶でしょその要求などと思いながらもエリカがびつくりしていた師匠ポーションを渡してみると、「おお！」だとか

「こ、これは！」だとかあたふたしたあと、あっさり本物認定を受けた。

何でもあのポーションは《スーパーポーション》などと呼ばれる最高級品だったらしい。

作り出せる人間はめったにいないのだとか。

俺、そんな貴重で高価な物を栄養ドリンク気分でがぶ飲みしてたのか…

とにかく、こうして俺はこの国の首都に護送されることになったのだった。

回想が終わり、意識を現状に戻す。

… あーあ。あの時駐在暑の入り口で対応してくれたおっちゃんが護送についてくれれば雑談で時間を潰せたかも知れないのになあ。

あのおっちゃんは丁寧かつフレンドリーな感じだったのに今いる騎士様は偉そうだし。

何でもエリート騎士らしいけど。

「はあ。…暇だなあ。」

俺は、馬車の窓から見える代わり映えのしない草原を眺めながら深いため息をついたのだ。
った。

ドゥナードゥナ (後書き)

感想をくれた方、本当にありがとうございました。あまりの嬉しさに本文もいつもの二倍近い分量での投稿となりました。ご指摘は今回の話で補足する形で修正しました。今後ともよろしく願います。

我こそ八へ賢者へナリ

「……い、おい！起きろ！何のんきに寝てやがるんだ！！」

誰かに荒っぽく肩を揺すられている。

「早く起きろよ！この野郎！！」

うるさいな。俺はまだ眠いんだよ。

「おい！そいつに構ってる暇があったら少しでも敵を減らすぞ！早く迎撃に戻れ！」

ふうん、敵ねえ。つては…？敵だと？

一瞬で目が覚めた。

「おい！敵って何だ！」

馬車の扉越しに騎士達に叫ぶ。

その瞬間、バン！という衝撃音と共に目の前の馬車の壁から金属片が突き出した。

鋭く尖り、銀色に曇った輝きを放つ金属片。

初めて見たが、これは多分…

「ゆ、弓矢…？攻撃されてんのか…！？」

覚悟はしていた。

魔法薬なんかがあるし、騎士団なんかもある、
、どう考えてもファンタジーとしか思えない
この世界では…命のやりとりも身近なんだろうと。
少なくとも、日本よりは。

言い直したほうが良さそうだ。

覚悟をしたつもりだったと。

冷や汗が止まらない。口の中がカラカラだ。

吐き気がする。頭の中で金属音が響く。

矢が着弾した時の衝撃音が何度もリピートされているように感じる。

俺は、その場から一步でも動いたらその瞬間

飛んできた矢に貫かれるような気がして動けなくなった。

怖い。

俺は、その場で息を殺し続けた……………

どのくらい時間がたったのかわからない。

馬車はゆっくりと速度を落としてゆき…やがて止まった。

辺りは既に静まり返っている。

攻撃を受けたあと、誰も馬車の扉を開けていない。

次に扉が開くとき、そこに立っているのは…

ガタリと扉がなった。

俺は弾かれたように後ずさる。

直ぐに扉は開き… たっていたのはあの無愛想なエリート騎士の男だった。

あまりの安堵に足の力がぬけて膝をついてしまう。

「た、助かったんで…」

「おい！お前《狂賢者》の弟子なんだろう！？」

「すか？つてえ？あ、はいまあ。」

「仲間が負傷した！見てやってくれ！！」

血の気が引いた。

「どこです！？」

「こっちだ！」

騎士に手を引かれてヨタヨタと馬車から転がり出た。

「っ！うあああ」

辺りは血の海だった。

馬車の後方、扉の外のスペースから血が滴り落ちていて、道に転々と跡を残している。

負傷した騎士は、簡易担架のようなものにのせられて地面に横たわっていた。

右側の脇腹に矢が突き出していて、呼吸に合わせてゆっくりと動く。

「あ、あ、ああ……。」

「あんたを守って怪我したんだ！金ならいくらでも言い値で払うから助けてやってくれよ

！！」

視界が真っ赤に染まる。

呼吸が浅くなる。

度重なる非常事態と精神的重圧にパニックを起こしかけているのがわかるが、自分ではどうしようも無い。

もう、頭がどうかしそうだ…！

―落ち着けバカ弟子―

「!?!」

いま、師匠の声が…?

「この声も生前保存したものだ。お前が初めて大量の血を見た時に、正確には血を見て心の均衡を崩した時に再生されるようにした」

「あたふたするな！お前はこの天才たる伝説の賢者の唯一弟子だぞ。僕の名を汚すつもりか？」

「血なんて珍しくもない。お前の中にだって大量にある。いいか？僕亡き未来、いや、今

。お前が助けられなかったら誰がやってもそいつは死ぬ。だったら初めての治療の実験ぐらいのつもりで処置してみる。どうだ、感謝しろ、お前は今世界最高の治療を受けてるんだぞ、ぐらいの心持ちで助けてみせる！」

「僕でありお前でもある《狂賢者》は、世界最高の賢者であり、研究者であり、治療者でもあるんだからな」

俺は、いつの間にか閉じていた目を開けた。

動揺は既に微塵も無い。

「……はは。馬鹿だな俺は。」

ちよつと《記憶》を探ればもつともつと酷い怪我なんていくらでも見てきたのに。

師匠から受け継いだ《記憶》は、既に俺の一部として完全に癒着している。

パニックで己を見失ったりしなければ何をすべきかはすぐに浮かんでくる。

さあ、《賢者》を始めよう。

師匠を超え、至高の賢者となることが俺の存在理由と決めたのだから。

我コソハ《賢者》ナリ（後書き）

この世界でいう《賢者》とは、医療、薬学、高度（この世界基準で）な科学、歴史、など、専門的かつ高度な知識を必要とする職業

および学問を修めた人の事をいう。

《狂賢者》は、薬学と医療を専門とする賢者の筆頭であり、態度はともかく本文中での彼の「世界最高の治療」というのは真実である。

アナザー・スピリット(前書き)

超展開です。とうとう作者は本格的に中二病を発症しました。

アナザー・スピリット

「おい！動かなくなったと思ったら今度は突然一人でぶつぶつ…おかしくなつたか？」

「…失礼だな。治療を開始する。離れていてくれないか。」

まあ、治療と言っても投薬しか出来ないわけだが。

「さて、やるか。」

まずは患者の状態を把握する。

患部を確認。

貫通矢創レベル3。

患部確認と並列処理で過去の貫通矢創の治療記録を脳内検索。

動脈への被害は無し。

全治療記録から87650件の治療記録が該当。

患者の状態からリアルタイムで絞り込みを開始。

重要臓器である小腸及び肝臓への損害を確認

一次検索結果から更に3120件を選抜。

血圧低下中。心拍微減中。呼吸浅化。

二次検索結果から更に182件を厳選。

脳内同時再生処理可能件数に到達。

記録を再生。同時に患者と比較を開始。

「うぐっ！…これは、効くなあ…」

目の前の騎士の傷口を確認しつつ、頭の中では師匠が過去に行ってきた治療記録をいっぺんに再生…つまり《思い出す》。

オンポロパソコンにスパコンでも悲鳴を上げるような量の情報を無理やり処理させるようなものだ。

当然、無茶のツケはとんでもない頭痛という形で跳ね返ってくる。

世界最高品質魔法薬とはいえ、薬は薬。

過剰な使用は副作用や身体への大きな負担をもたらす。

…ポーションのように即効性や副作用の抑制に重点が置かれていればべつなのだが、流星にこの怪我はポーションレベルの薬ではただの延命すら怪しい。

ましてや、完治などまず不可能だ。

そこで師匠が編み出したのは自身の膨大な数の治療記憶から参考になりそうな記憶を参照しつつ、治療に当たっている患者専用の魔法

薬をその場で調合する方法だった。

発想としてはそこまで画期的ではない。

ただ、師匠の場合はスケールが大き過ぎた。

あの人から受け継いだ治療記憶は総数は約三十五万件。

一度の治療に参照する記憶は約三百。

当然、貧弱な人間の頭ではそんな数の情報をさばけるはずもない。

だから、師匠は《人を辞めた》。

どうやったのかは記憶に残っていないが、彼は自分の脳内にもう一つの基礎思考回路をうめこんだ。

つまり、治療中、または作業中に思考回路を切り替えると、脳の処理能力の大きな部分を使っている《感情》が停止し、脳の処理能力の全てを治療や作業に関係ある事柄に集中することができるわけだ。再びパソコンに例えると、一つのパソコンに二つのOSを入れて、普段使いの万能タイプと仕事に使う特化タイプを使い分けるといふ事だと言えるかもしれない。

聞くとも便利だけに感じられるが、当然リスクもある。

元来、動物は感情と共にある。

感情を無くしてただ動くだけならば…それは機械と変わらない。た

だの道具だ。

基礎思考回路を作業に特化させ、感情を凍結させた状態を長時間継続させた場合：

最悪、感情が復元出来なくなる。

それは、人としての魂の死とも言つべき事

そのようなリスクを背負って研究に打ち込んだ狂気の賢者こそが、《狂賢者》ジブリールなのである。

そしてまた、その歪な精神構造を継いだ俺も同様のリスクを持つ。

…まあ、普通に使う分には問題ないけどね。

とにかく、今俺は師匠の記憶に学びながら魔法薬を調合している。

身体の損傷を過不足なく修復し、減少した血液を補い、全身に活力を与えるのに最適な魔法薬を素早く調合してゆく。

近くに医者がいなければ致命傷、普通の医療者ならいても文句無し
の重傷患者扱いだろう深い傷。

だが、《狂賢者》の知識と技術を受け継いだ俺にはこの程度ならば
全く問題なく治癒できる。

治療を始めてから十分後には頭痛に顔をしかめる俺と、穏やかな寝
息をたてる血まみれの騎士の姿があったのだった。

アナザー・スピリット（後書き）

今話における脳の働き、精神論は全て作者によるフィクションであり、創作上の設定です。他の人に話すとあなたと作者が恥ずかしい思いをするので止めましょう。

閑話 道中会話（前書き）

今回は閑話なので特に短いです。

閑話 道中会話

「へー。じゃあこのペースならあと3日くらいで目的地に着くのか。」

「まあそうだけど、王都周辺の道はいつも混雑してるから4日くらいは覚悟した方がいいと思うよ。」

「え？だって俺って王様に呼ばれてんだろ？優先されたりしないの？」

「いくら陛下に呼ばれての参上だって本人が高い身分の人間でなければ優遇されたりはしないんだよ。大体、この国は自由と平等を謳う国なんだし。」

「ふん。勉強になった、ありがとな。」

「いやいや、お安いご用さ。君は命の恩人だしね。」

「だから。あれは俺を守って怪我した相手を治療しただけであつて感謝されるようなことじゃないんだつて。」

「わかつてるよ。だから僕が君に勝手に感謝してるだけさ。」

「ええい、頑固なヤツめ。」

「……それを君が言うかい？」

血まみれ騎士を治療して2日。

だいぶ体力の回復した彼だが肉体の損傷はまだ全快ではない。

体にかかる負担を考慮した俺が薬の調合で微妙に回復度を抑えたからだ。その甲斐もあつてか副作用はほぼ完全に抑えられたようだ。

あと二日間も大人しくしていれば傷跡も残らないだろう。

俺が数日安静という診断を下したので彼は馬車の室内待機となり、結果、以外と年が近いと判明した俺と意気投合したのだった。

ちなみに名前はエスカート・ホワイトという。

「あー。暇だー。馬車の中ってやることないよなあ。」

「馬車なんだから当たり前のことだろう?」

「いや俺馬車に乗るのって初めてだし。」

「ああ。ずっと山に籠もってたんだっけ?…ん?それって暇な時何してたんだ?」

「研究と実験。」

「流石は《狂賢者》様の弟子…。ちなみにどんな実験をしてたんだい?まあ、僕にわかるとも思わないけど。」

「うーん。最近で一番面白かったのは…ああ、あれだな。あの山の山頂にあるもので、何にでもあう万能調味料をつくろう大実験。」

「君は何をしてるんだ……………」。

「結局あんまりいいのは出来なかった。でも、何個か不思議な味にはなった。」

「それは一般に失敗って言うんじゃない……………」

「まあな。」

「認めるのか！？…ああ、《狂賢者》様のイメージが崩れてく……………」

「何でだ？俺がやった事だぞ？」

「いや、なんか《狂賢者》様って医術を極めながらも気難しくて謎めいた方だったから…弟子とはいえ、いや弟子だからこそそんな事やってるとは。」

「どづいつこった？」

「弟子は師の背中を見て育つってことさ。」

「ああ。なるほどね。」

王都到着。あ、待って一人にしないで…

俺の初治療から6日。

ようやく王都に入れる事になった。

「…やっと着いたのか？ははは。どーでもいいけど。もう俺馬車で暮らそうかな…」

「リヨ、リヨウ！しっかりするんだ。もうすぐ馬車から降りられる、衝撃と保存食ともお別れできるから戻ってこい！」

慣れない馬車での移動生活に、俺の心は既に真っ白に燃え尽きていた。

「何をやっているんだお前たちは。もうすぐ城に着くから身だしなみでも整えておけ。」

馬車の前からエリート騎士のおっさんが顔を出す。

このおっさんの態度も俺がエスカートの傷を治療して以来大分軟化してきてはいる。

「燃え尽きちまったよ、おっちゃん。」

「おいこらリヨウ、すいませんレジアスさん（エリート騎士（笑）の名前）。すぐに準備します。」

真面目だねえ、エスカートは。

「まあいいや。おっちゃん。城つてどれなのさ?」

「ああ?見りゃあわかるだろうが。真っ正面のデカいのだよ。」

そう言つて体をどかしてくれろおっちゃん。

顔と口調に似合わず一度認められるとかなりいい人であつた。

「……ああ、確かにデカいな。」

何メートルあるんだよ。明らかに中世レベルの建築技術じゃねーだろ。

「あの城が建てられたのは約二百三十年前。当代の《三賢者》の一人である《塔賢者》と呼ばれていた人物が設計、指揮をとつて建てられたそうだよ。」

ポカーンと城を見上げる俺に、後ろで荷物をゴソゴソやりながら解説してくれるエスカート。

声がないしか誇らし気である。

「へえ。《三賢者》がねえ。」

なるほど、天才の集まりか。想像以上に凄いトリオらしい。

エスカートとそんな話をしていると...

ゴトン!

馬車が動きを止めた。

「お、着いたのか？」

早速馬車の扉を開けて外に出ようと……

「うおおう!!」

して、目の前にニユツと突き出された槍の穂先に室内へ押し戻される。

「……それぞれの身分と入城の目的を言え。」

「レジアス・フライハイト。王国近衛騎士団騎士補。目的は《狂賢者》がらみの人物の護衛。」

「同じくエスカート・ホワイト。王国近衛騎士団見習い騎士。」

え、この人達って近衛騎士だったの!?

……いやじゃあなんであんな辺境にいたんだよ。

残る一人の自己紹介も終わり、俺の番になった。

「あ、えーっと……リヨウ・アズマです。身分は……何だろ？平民って言えば良いのか？目的は……いや用があるのは俺じゃ無いんだけど。」

「……彼は《狂賢者》の唯一弟子です。力量の程は道中実際に確認しています。」

何かレジアスのおっちゃんがフォローに回ってくれたみたいだ。

その甲斐あったのかどうか（通してくれた時の門番の顔をみる限り効果あったようだ。最後まで俺を疑わしげに見ていた。フォローが無ければ入れなかったかも）、俺達は無事に王城に入りこんだのだった。

レジアスとエスカートにまず連れて行かれたのはやたらと大きなホールだった。

なんでも、城に用がある部外者はまずここで用件の概要を話して緊急の有無を確かめられるんだとか。

まあ、王様が忙しいってのは何となく想像つくよなあ。

しかし、受付っぽい人に話をしたら「しばし待たれよ。」とか言っ
て慌ただしく立ち去って以来さっぱり戻って来ない。

むう。暇だなあ。

「なあ、エスカート。近衛騎士団ってことはこの城の中ってよく知
ってるのか？」

「え？あ、ああ、まあ。一般人よりはね。」

「んじゃさ、あの正面のどっかい扉ってどこにつながってんのさ？」

「あそこの扉は謁見の間に繋がってるけど。なんで？」

「暇だからに決まってる。じゃあ、あれは？あの上の方の小さめの扉。」

「……悪いけど、これ以上は守秘義務にかかるから。」

「そーか。なら仕方ねーな。…にしても何時になったら迎えくんだよ。」

もう二、三時間待つてる気がする。

と、そこでようやく新しい人物が登場した。

さっきエスカートに尋ねた小さめの扉からちょっと偉そうな暗紅色の長衣を纏った男が顔を出した。

「リヨウ・アズマ殿はついて来て頂きたい。護衛の近衛騎士団員は騎士待機室で待機するように。」

「はつ。」

一斉に唱和して後方に去って行く護衛の二人。

ちなみにあと一人は馬車をひいてどっかに消えた。

…おいおい。数少ない知り合いが全て消えちゃったよ。

「リヨウ・アズマ殿、ついて来てください。」

「……うい。」

仕方なく階段を登り、偉そうな男についていく。

ぼんやりと光る不思議な光源に照らされた廊下を偉そうな男は黙々と進む。

何故か窓の全く無い廊下で、薄暗くて静寂に包まれた妙に嫌な雰囲気のところだった。

ああ、早く明るい所に出たい。

俺はうんざりしながら男についていくのであった。

オレオレ、そう、弟子だよ！

「…到着しました。こちらへ。」

「……………」

「アズマ殿？」

「…っあ！？…………ああ、すいません。」

完全に放心していた。

あんな不気味な廊下を初対面（しかも無口）の男と延々と歩かされてみる。

現実逃避もしたくなるわ。

「…なんなんすかこの部屋。」

かなり大きな長方形の部屋だった。

が、奥の方にはでっかい暗幕が張られて見えなくなっている。

さっきの廊下よりは明るいが…やはり薄暗かった。

「今からあなた幾つかの質問がかけられます。出来るだけ正確に解答して頂きたい。」

…おゝい。俺の質問は？

と、暗幕に遮られた部屋の奥から声がかげられた。

「アズマさん。楽にして下さい結構ですよ。しばらくの間お付き合ひ下さいな。」

それは、女性の声…だが、年齢がさっぱりわからない不思議な声だった。

二十代のような軽やかな音だが老女のような落ち着きと重みも感じる。

自然に、きちんとした敬語になった。

「……はい。よろしくお願いします。」

「まあ、そんなに固くならなくてもよろしいのに。」

ふふふ、と（多分）微笑んでから声は話に入った。

「さて、あなたはジブク…ゴホン、《狂賢者》の弟子であるそうですが」

いま、師匠のごとく自然に「ジブくん」って呼ぼうとしたぞこの人。

…何者だよ。

「あなたから見た《狂賢者》はどんな人でしたか？」

「師匠の人柄ですか？…うん。まあ、間違い無く人格破綻者でしたね、ええ。あそこまで偉そうで尊大な人を俺は他に知りませんよ。」

「…そうですか。では、私の名前はマリア。《史賢者》マリアです。何か言うことはありますか？」

「…あなたが、マリアさんでしたか。師匠から手紙を預かっていました。」

「見せて頂けますか？」

「ええ、あなた死てですし。」

俺は、すつと横にやってきた男に手紙を渡す。

師匠に貰った《無限鞆》にメモと一緒に入っていたものだ。

もし機会があれば渡して欲しいが、別に渡さなくてもいいだそうだ。

どっちだよ、師匠。

男が暗幕の奥に消え、声の女性、《史賢者》マリアが手紙を読んでいるあいだ、そんな無駄な事を考えていた。

「…なるほど。彼の全てを受け継いだわけね。」

「…手紙に書いてあったんですか？」

手紙の内容は俺も見えていない。

「ええ、そして自分の全てを継げた弟子は、確かに《賢者》と呼ばれるに足る知識を持っているとも。」

「はは。まだまだ師匠にかなう気はしませんけどね。」

「いいえ。彼が人を認める事は極めて少なかったわ。…ふふ、しかしあの子がねえ。」

あの子ってのは俺だろうか。

それともまさか師匠の事だろうか。

…師匠、確か老衰で亡くなったんだよな。

「いいでしょう。あなたが《狂賢者》の弟子である事はこの《史賢者》が保証します。…王に連絡つけてくれるかしら?」

「はっ!」

男が暗幕をくぐり抜け、俺の背後の廊下を足早に去っていった。

…いやまて! 《史賢者》と二人きりって気まず過ぎるんだけど!

「アズマくん。」

「あ、はい。」

む、ちょっと親しげになった。

「こっちに来てもらえる？」

「え？暗幕越えていいんですか？」

「もう構わないわ。」

「はあ、それじゃあ。」

俺は暗幕を持ち上げて奥に進んだ。

そこにいたのは……

「ふふ、はじめまして。《史賢者》マリアです。」

小柄だがかなりの美人だった。

身長は160は間違いなくないだろう。

足元まで届きそうな長い金髪に、深い思慮を秘めた底知れぬ、しかし穏やかな優しさを感じさせる碧眼。

身長割に、その、大変結構なプロポーションだった。

うん、眼福眼福。

外見年齢は二十代位だが…目がその印象を間違いだと伝える。

全てを知る古の森の大樹のような…その目が。

トップシークレット

底知れぬ輝きを秘めた《史賢者》のその瞳に、俺は圧倒された。

怖いわけじゃない。

彼女の瞳はひたすらに優しげな光を放っている。

「ふふふ。緊張しなくてもいいわ。異世界から来て大変だったでしょう。」

「あ、はあ……………はあ!？」

今何だったこの人!？

「あらあら。本当にそうだったみたいね。」

「え、ちよつ、何で知って…………？」

「私は《史賢者》。悠久の歴史を知る者にして、過去を生かす術を探る者。私、いえ、私達《史賢者》は恐らく世界で最も古き歴史を現在に伝えているわ。…そして、《史賢者》の記録によると、現在までに君を除いて三人の異郷の者達がこの世界へと現れているのよ。」

「か、彼等は帰れたんですか？自分の故郷へ？」

「…残念だけど、もとの世界へ帰れたという話はないわ。彼等はあなたとよく似た服装をしていたとの記録があったから気付けたけど、

彼等の晩年についての記録は極端に少ないから……。」

「……そう、ですか。いえ、覚悟は既に固めたつもりでしたけど……
やっぱり残念ですね。」

「……大丈夫かしら?」

「ええ、問題ありません。それより、何で王様に連絡を?」

「あら、決まってるでしょう?あなたの雇用の相談のためよ。」

「……決まってるんですか?」

「別に断るのも自由だけど、他にあてはあるの?」

……。

「ヨロシクオネガイシマース。」

選択の余地は無さそうだった。

「あら?お使いが帰ってきたみたいね。」

「はい?」

お使い?

「もう少しであなたにも足音が聞こえると思っけど……」

「え？どういふ事ですか？」

わけがわからん。

「ほら、さっき王を呼びにいかせた文官がいたでしょう。彼の足音がこっちに向かってきてるのよ。」

「よ、よくわかりますね。」

「あら、私はハイエルフだし、人間のあなたより耳がいいのは当然でしょう？」

「はあ、なるほど……人じゃなかったんですか!？」

「？ 気づいてなかったの？」

ああーっ！確かによく見れば耳が細長く伸びてる笹穂耳だ！

「え、じゃあもしかして凄い年上なんじゃ……」

「リヨウくん？」

あれ、なんだか寒気が？

《史賢者》の顔は、満面の笑みだった。

……こんな怖い笑みは初めてみるが。

「ギャアー！すんませんすんませんすんません。」

「ふふふ。女性に年齢の話題はダメよ？」

「イエス、ママ！」

と、まあそんな雑談をしていると……

「報告いたします！」

「あら、帰ってきたみたいね。」

「ほ、本当ですね。」

自分より十五センチは小さい女性の威圧感が逸れて心底ほっとした。

「それで？我らが王は何て言っていたの？」

「はっ。リヨウ殿を連れて謁見の間に来てほしいとの事にございませす。」

「わかりました。それでは行きましようかリヨウくん？」

「……うい。」

こうして俺は一国の王に謁見する事となったのだった。

のだったはずだったのだが。

「伝令です!!」

現実には、俺の想像の斜め上に行くのが好きらしい。

チキンと慎重は紙一重

「で、伝令です！ たった今《メルクリウス公爵家》の長男ゼウラス様が発作を起こされました！ 《狂賢者》様のお弟子様の力を借りたいと陛下が申しております！」

「……そらまたなんともタイミングのよろしいことで。」

…俺の実力を測ろうとしてる？

「違うわよ。」

「…何がです？ マリアさん。」

「実力調査じゃなくて、本当に倒れたのだと思う、って事よ。」

「あなたは読心術でもつかえるんで？」

「あら、顔を見れば大体わかるわ？」

「…さすがは年の功で…」

「リヨウくん？」

「は、ハハハハ。冗談ですよ。」

剣呑な視線を向けて来るマリアさんを意識から外し、現状について考えてみる。

申し出を受ける事であるデメリットとメリットはどちらが大きい？

…まあ、どう考えても治療を蹴った場合のデメリットが大き過ぎる。

この世界を何も知らない俺は、今城を放り出されたら生きて行く事が困難だ。

いやまあ、生存だけなら何とかなるうが…

と、なると城で王に雇ってもらってその間に必要な常識を学ぶのがよからう。

つまり今の俺は面接に向かう就職活動中の学生みたいなものだ。

雇い主に最大限自己の有用性アピールをしなくては！

まあ、その倒れた人も見ず知らずとはいえ助けられるなら助けて悪い気はしないしな。

「…青年の苦悩は終わった？」

マリアさんがからかってくる。

年寄り扱いの仕返しだろう。

「ええ、サツパリしました。」

俺は伝令兵に向き直った。

「力を貸しましょう。案内たのんます。」

「は、はい！こちらです！」

チラチラとこちらを確認しつつ足早に進む伝令兵を視界に入れつつ、俺の思考（マリアさんに言わせると青年の苦悩）は続く。

マリアさんはああ言っていたがやはり向こうが俺の実力を見るいい機会なのは確かだ。

失敗は許されないよなあ。

しかし…《公爵家》ってめちゃくちゃ高い地位だよな？

そんなに要人の治療を部外者に任せていいのか？

うーん、それだけ《狂賢者》のネームバリューは凄いだろっな。

にしても、発作？

前から病気にかかったのか？

うーん、やはり情報が足りん。

「マリアさーん。その、ゼウラスく…さんって前から何らかの病にかかってたんですか？」

「ええ、一年と少し前から。何の病かは私は知らないけれど……」

「なるほど。症状とかも？」

「ごめんなさいね。」

「いえいえ、助かりました。」

ふむふむ、なるほど。

サッパリわからないから現地で考えるとしますかね。

しばらく黙々と伝令兵について行くと、感動的な光景を目にする事となった。

「おお…魔法陣だ……。」

連れてこられた城の一室には、綺麗に整列されて分けられた魔法陣（らしき物）があった。

地面に複雑怪奇な模様を描く円形の図面が、それぞれ違う色の光をぼんやりと放っている。

「え、え？これ使うの？」

「ええ、王国建立後すぐに《移賢者》が王都内の各所に張り巡らせた転移魔法ネットワーク《ディメンジョン・ドア》の中枢部よ。」

また《三賢者》かよ。

本当に規格外だな。

「名前が長いから普段はただ《ドア》とだけ呼ばれてるわ。」

どこでもいけるドア…

某二頭身動物型ロボを思い出したぞ。

青いやつ。

「何してるの？早く行きましょつ。」

とつかマリアさんや。

「？」

何だか態度が変わってきて…

「ふふふ。気のせいですよ。さあ、行きましょつ。」

え、何で突然敬語になっ…

笑顔のままのマリアさんに魔法陣の一つに押し込まれた俺の視界を、薄青い光が染め上げていった……

ムーヴメント・アート(前書き)

短めですが、今日中にもう一本更新したいと思っています。

ムーンライト・アート

視界を埋め尽くす青い光がおさまると、俺はまた違う部屋にいた。

しかし…さっきまでいた城がバリバリの西洋建築なのに対して何だか和風な感じの部屋だな。

木張りの床に漆喰らしき白壁。

天井にはこれまた木製の骨組みが見える。

梁、とか言うんだっただか。

「ここが公爵家なんですか？」

「そうよ。ここが《メルクリウス公爵家》。城とか街とかとは全く違う建築様式でしょう？何でも、魔人特有の様式だそうね。」

「魔人って…また新しい言葉が出て来ましたねえ。」

響きからしてヤバそうだし。

でも、この武家屋敷みたいなのは気に入った。

メルクリウス公爵って人とは仲良くしよつと。

「あの、すみません。もう少し急いでもらえますか？」

あ、この人（伝令兵）の事忘れてた。

「すみません、引き続き案内よろしく申し上げます。」

「は、ハイ！それではついて来て下さい。」

再び案内役の伝令兵に連れられて、今度は和風廊下を歩き始めるのだった。

「おおー！」

歩き始めてしばらくすると、庭園が見える縁側：にしては随分広かったがとにかく外と繋がっている廊下にさしかかった。

庭園も日本風で、波を表すうねをつけられた白い砂利と松のような植物をメインとしてあちこちに造られた岩と緑の空間があった。

夕暮れ時を少し過ぎた月の光が優しく白砂利を照らし、また白砂利は月光の乱反射で淡く輝いている。

「…綺麗なもんだ。」

思わず、賞賛の言葉が漏れる。

見とれそうになりながら進む俺だったが、庭園の奥に人影らしき物を見つけて目を凝らした。

薄暗い闇に紛れてわかりづらいが…風に揺れる長い髪は女性だろう

か。

黒髪が闇と同化して認識しづらい。

ただ、薄暗闇の中で月光を浴びて立つ彼女の姿はハツとするくらい神秘的で絵になる光景だった。

ふと、俺の視線を感じた…のかどうかは知らんが、人影が振り向いた。

多分、目が合う。

金色の瞳……？

次の瞬間、人影はフツと消え去った。

「まさに夢幻のごとし、って具合だな…。」

「?どうしたの、行きましょう。」

「あ、はい。」

おっと、仕事で来てたんだった。

……多分、倒れてからだいぶたってるけど大丈夫かな？

「と、到着いたしました。自分が入る事のできる場所はここままで

す。」

「どうも。マリアさん、この先ってわかります?」

「目の前の紙扉を開けばすぐよ。」

紙扉?...ああ、障子のことね。

「んじゃ、失礼します。」

扉を横に押し開く。

すると.....

「おお...布団だ...。」

「アズマくん。」

「どうも初めまして。《狂賢者》弟子のリヨウ・アズマと申します。よろしく。」

しかれた布団に横たわる少年とそばで威圧感を放つ中年男性、奥で瞑目する若い男に対して割とフレンドリーに挨拶した俺だった。

トランスマインド・シークエンス

「ほう、貴様がジブリールの奴の弟子か。」

最初に口を開いたのは、布団のそばに座る中年男性だった。

なんだか無駄に貫禄があるな。

「はあ、どうも。え〜つとどちら様？」

「フツハツハツハ！」

あんた悪の首領かよ。

「ククク、すまん。名を聞かれたのは久しぶりのことだったから
つい、な。」

ついなんだよ。

「はあ。それで、どちら様なんで？」

「うむ。我が名はラインハルト。ラインハルト・ロード・イデアだ。」

「…先に言いましたが、リョウ・アズマです。どうぞお見知りおきを。」

当然だ、フツハツハツハ！と再び悪役笑いをするラインハルトを尻目にとりあえずマリアさんにヘルプをだす。

「マリアさん、マリアさん。あの人誰？」

「…あの方がこのイデア自由信仰王国の王様よ。」

え、マジすか。

「……自己紹介など後でいい。まずはゼウラスの容態と治療を。」

部屋の奥にいた30前後の見た目の男がつぶやいた。

ま、それもそうだ。

「わかりました。んじゃ、失礼しまーす。」

布団に近づく。

患者と思しき少年は、弱々しい呼吸で眠っていた。

うん、一時的にせよ落ち着いてるみたいでなにより。

「とりあえず、今までの経過を教えてくださいませんか？」

「…今専属の薬師をよぼう。」

医師だったり医者だったり薬師だったり呼び方がバラバラだな。

そんなことを思いながら、精神変換に入る。

一刻を争うわけではないので、簡略化せず正式な手順で感情という

プログラムを圧縮、凍結させる。

脳内プログラム走査。

感情、及び付随するプログラムを検出。

固定凍結プログラム以外の不要プログラムを検索中…完了。

全ての不要プログラムを順次圧縮開始。

圧縮済プログラムを追加凍結開始。

全思考変換プロセス完了。

エラーを検出中。

エラーは検出されませんでした。

精神変換シーケンスは正常に完了しました。

必要な精神思考プログラムを展開します……

…よし。

精神変換が終了した事を感じ、辺りに意識を向ける。

正式な手順で変換を行ったため、以前エスカードを治療した時より遥かに情報処理性能が向上しているのを感じた。

部屋の中には立派なお髭の老人が増えていた。

「把握している病状経過を頼む。」

おそらくこの少年の主治医だと思われる老人にそう言うと、俺は俺で病状の把握を開始することにする。

心拍、呼吸、体温、血中酸素濃度等計測中。

判明した特徴から該当する症例を検索。

老人の方は少し揉めているようだ。

まあ、彼も一般的には最高峰に立つ医師なんだろう。

突然でてきた若僧に指図されて面白いわけがない。

意識の0.52%をそちらに振り分けたまま残りの8.14%を計測に、9.1.34%を記録の検索に割り振る。

「…仕方があるまい。おい、若僧。話してやるから聞け。」

老体がどうやら話す気になっただらしい。

意識分割割合を変更し、老人に7.86%を向ける。

老人の話す今までの経過、現在の病状、過去の記録を総合的に考慮し、病因を探る。

現在の俺の思考能力、とりわけ与えられたデータを分析、解析する

演算能力はバカげた性能を誇る。

答えはすぐにでた。

「…魔人族つてのは魔力量が多いのか？」

唐突な俺の問い。

ポカンとする一同だったが、俺の事情を知るマリアさんだけは即座に返答をよこした。

「ええ、魔人の魔力の多さは有名ね。」

「そうか、感謝する。」

それで確信が持てた。

「彼は心臓疾患を患っている。すぐに治療に入る、がここから先の作業は繊細だ。全員、黙っててくれ。」

《無限鞆》を開いた。

それじゃ、《賢者》を始めるか。

就職内定…こんなに嬉しい言葉はないなあ。(前書き)

今回はフラフラにしては長めの投稿になりました。ちょっと達成感があったり。

就職内定…こんなに嬉しい言葉はないなあ。

《無限靱》から必要な薬品類を取り出していく。

総計、21種類。

これらの材料を正確な手順と分量で調合してゆく。

この世界での治療と言えば、一般に投薬治療の事である。

魔法薬なんて至極便利なものがあつたために外科的治療法が発達しなかつたんだろうな。

魔法薬を調合するのは非常に難しい。

元の世界とは違って魔法やら魔獣やらが普通に生息し、得に魔獣から採れる希少な成分はとんでもなくデリケートな扱いを要する。

例えば、とある蛇型魔獣の牙にある毒は0.2mg以下0.4mg以上の量では猛毒だが、ある難病の患者にきつかり0.3mg与えると特效薬としての効果を表す。

しかし、保管は光の当たらない湿度が3%以下の場所でしかきかない。

どちらかにでもひっかかると、三十分もすれば腐りだすのだ。

俺も《無限靱》が無ければ持ち歩く事なんてはなから諦めていただろつ。

とにかく、このように十分の一ミリ単位での薬品調合なんて生身の人間に出来る筈がない。

それはまあ、何度も挑戦すれば偶然成功する事もあるし、長年その調合に的を絞って練習を重ねれば成功率も上がるだろうが。

しかし今、精神変換を行っている俺は人間ではない。精密機械並みの作業が可能なのだ。

今の俺には緊張なんて《感情》は存在しないことだし。

半分の調合が終わった。

だが、まだ半分だ。

俺は慎重に作業を続行する。

「ふう…調合、完了。」

作業の終了と共に精神変換が解除される。

あー疲れた。

俺は成分の沈殿を防ぐために薬の入ったピンをふりつつ振り向いた。

「あ、あれ？」

なぜ皆さんそんなに驚いてらっしゃる？

呆然としていた一同だったが、最初に口を開いたのはさすがに言うか何と言うか…王であるラインハルトだった。

「ほう…なる程。二代目《狂賢者》は初代に劣らぬ傑物であるというのは真実であったか。」

「どこで聞いたんです？それ。」

「ククク。なに、王ともなれば特別な情報網の一つ位もっている。」

「へー。」

「それより、早く薬を飲ませなくてよいのか？」

「あ、そうだった。と言っても…寝たままじゃなあ。」

「…起こして構わない。」

例によって、三十代位の暗い男が答えてくれた。

いまいち彼とこの場との関係が分からないが、素直に患者に起きて貰うことにする。

「おーい。」

ユツサユツサ。

「…ん、うづ、ん。」

あ、起きたか。

目を覚ました少年に出来立てはやはやの薬を飲ませた。

少し、そう、少しだけ苦い薬だったため、少年は悶絶していたがこれであと一週間も安静にしていればほぼ健康体だろう。

ちなみに、一口飲んだとたん半泣きでそれ以上飲むのを嫌がった少年だったが、後ろで瞑目する男に一喝されたら素直に飲んだ。

しばらくぐずっていたものの、今は再び夢の世界へ旅立っている。

さて、そろそろ質問タイムといこうか。

「んで？王様はわかりましたけどそっちの方は？」

「うむ。彼はだな。」

あんたには聞いてねーよ。

「…クロノス・メルクリウスという。息子への治療を感謝する。料金は言い値で払おう。」

「メルクリウスさんですか？…うん、どっかで聞いたような…」

「リヨウくんリヨウくん。」

おっと、ここで恒例となりつつあるマリアさんヘルプ。

「彼が当代のメルクリウス公爵よ。」

マジか。

そんなに偉い人だったのかよ。

…よし、ごまかそう。

「ああ！そうだ、じゃなくてそうでした。メルクリウス公爵の子供…御子息を治療しに来たんです。」

「…無理にかしこまる必要はない。貴公は既に《三賢者》への就任が暫定的とはいえ決定している。《三賢者》ともなれば単純な地位としては公爵位を上回る。」

マジすか！？

え、《三賢者》って凄いなおい。

「《三賢者》の地位は王と同等。国内では最高位よ。もちろん、部下は持てないし、政治にも王からの相談という形でなければ干渉できないけれどね。」

まあ、当然だろう。

「昔から《智》の力の大切さを知り、自らの力として取り込んできたからこそ他国に対して優位を保てたこの国独特のシステムなのよ、《三賢者》は。…まあ、最近他国でも似たような物を設立したみたいだけど、質としてはこの国には大きく劣つたものでしかないわね。」

「なる程…。説明ありがとうございます。」

「そして余はお前を《三賢者》に迎え入れたいと思っている。」

「いや〜。行くあてが無いんで雇ってくれるのはありがたいんですけどねえ、今の説明を聞くと俺って《三賢者》にふさわしいのかなあ…と。俺の知識って基本師匠から受け継いだだけのもんだし…」

「あら？でも、《狂賢者》は自分以上の頭脳を持つものが現れたときのみに知識を継がせると言っていたわよ？」

「え？」

なんだそれ、聞いてないぞ師匠。

「ほら、さっきの手紙があったでしょう？あれに、自分の頭脳の粹を集めた難問を載せてある問題集を一発で、かつ一日で解けた場合のみ知識を伝授することにする。君がこの手紙を読んでいるということは、僕自身ですら不可能だったあの難題をくぐり抜けたものがあるという事だろう。恐らく、僕の永い生涯の中でも一番の驚きだ。つて。」

そ、そうだったのか…。

まあ確かに大学入試レベルの問題だったけど。

「ほう、ならば問題は無いな。実力の方はたった今確認したばかりであるし、城に戻ったらすぐに準備を進める事にするか。」

そこで王様ラインハルトはこちらを見てニヤリとした。

「こちらとしては賢者が増えるのは喜ばしい事だ。お前にとっても悪い話ではあるまい。」

まあ、就職内定は嬉しいけどね。

何だろう、あの笑顔で不安になるなあ。

「…ま、これから宜しくお願ひしますと言っておきます。」

前向きに行くとしますかね。

激録！！師匠の私生活！

無事に公爵家長男というVIPの治療を完了した俺は、マリアさんと王様と公爵の人と4人で城に向かっていた。

護衛なんかは要らないのか聞いたところ、屋外に出ないし、王様と公爵の人がいればそこの暗殺者程度には遅れをとらないらしい。

へへ、凄いね。

こうして見てるだけだと普通のおっちゃん和兄ちゃんんだけど…

あれ？

「そう言えば、魔族ってなんか人と違うんですか？魔力が多い以外。」

公爵の人って確かただの人間じゃないって言ってたような…

マリアさん以外に何いってんだコイツ、みたいな目をむけられた。

…ちよつとへこむ。

と、ここでマリアさんヘルプ。

王様と公爵の人（…言いつらいなあ長くて。）に俺の設定と知識の偏りを伝えてくれた。

「ふむ、なるほどな。メルクリウス公爵、擬人化を解除してもらっ

ても？」

「……構わん。《擬人解除》」

「うおわあ！」

び、びつくりした。

メルクリウス公爵の姿が激変した。

元々白かった肌は完全に青白くなり、左右後頭部から頭の側面に沿って伸びた角は額の左右で上を向いている。何より驚いたのは目だ。…黒い白目に金の瞳、瞳の中心には猫のようでもあり爬虫類のようでもある黒い縦線。

黒髪と無表情は変わらなかった。

あ、悪魔みたいな尻尾がある。

「どうだ？これが魔人族の真の姿だ。驚いたであろう？しかし、この姿の公爵は威圧感があるからな、お前が緊張して治療に失敗しないように人の姿をとらせていた。」

なるほど…しかし、なんで王様が自慢気に説明した？

まあ、いい。

「…転移の間に到着した。一番の魔法陣が城行きだ。」

公爵が一つの魔法陣の上に立った。

俺たちもそのまわりを取り囲むように立つ。

「…行けるな。《転移開始》」

「うお…」

俺の視界は二度めの閃光に塗り潰された。

再び視界が戻ると、また西洋風の城の転移の部屋だった。

「さて、余はお前の任命の準備をしなければならん。メルクリウス公爵も手伝いを頼むし、そうだな、このままマリアにお前の部屋に連れて行ってもらえ。」

「俺の部屋ってなんです？」

俺は初めてここに来たんだが。

あ、客間とかかな？

「代々《三賢者》には城の敷地内にそれぞれの部屋が与えられるのよ。…というか、敷地内に《智の塔》っていう塔があって、そこを分割して三人で住んでるのだけ。」

ほうほう。では今日からそこに寝泊まりすればよいので？

「そう言うことね。幸いにも以前《狂賢者》が使ってた部屋がそのままになっているからそこに入って貰う事になるわ。」

ほう、師匠の部屋か。

…絶対危ない気がする。

「正直に言うと、室内のあちこちに得体の知れない薬品があるから危なくて掃除出来なかったのよね。」

「なぜそれを笑顔で言う？今。」

「お掃除がんばってね。」

…師匠、頼むから劇薬だの猛毒だの危険物を放りっぱなしにしてないでくれよ。

あんたの一人弟子が死ぬぞ。

そんな事を思いながら今度は一番奥の魔法陣に移動するのだった。

「おおう、確かにここは危険地帯、いや魔窟だな。」

《智の塔》に転移した俺は、マリアさんから共用スペースである食堂、談話室、相談室（談話室は《三賢者》同士の会話の場、相談室は外部の人間と《三賢者》の話す場所らしい。）等の説明を受けた。

ほとんどは、一階及び二階に存在している。

どうやら、《三賢者》以外の人間が入る事がある場所は全て二階までに集められているようだ。

二階の最奥、相談室を抜けると階段があり、談話室と共用リビングが広がっている。

三階はまるまる全て《三賢者》用の共用スペースだ。

三階の中心には三つの階段が上へ伸びており、四階以上は全て完全に三分された構造が最上階の七階まで続いている。

驚いたことに、結構な大きさを持つ塔の三分の一が四階分も俺に与えられたのだった。

気分はリゾート地の最高級マンションである。

まあ、もともと師匠の部屋であった場所の惨状を見るまでではあったが。

床に散らばった本や資料らしき紙束。

ぎっしり並んだ棚や器具と、所狭しと並ぶ怪しげな薬品類。

恐る恐る四階から七階まで往復してみたが、全て同じ惨状だった。

…師匠、生活感が皆無なんです。

しかしまあ、当面の目標は決まった。

居心地の良い我が家を作り出し、同時にこの世界の常識を身に付ける。

よっしゃ。頑張るぜい。

望郷の想い……が台無しだよ!! (前書き)

これからの連載方針について悩んでいるんですけど、これまで通り速度重視か、多少間をあけて長い文章を投稿するか、どっちがいいですかね？皆さんの意見を下さると嬉しいです。あと、感想等のコメントもお待ちしています。

望郷の想い……が台無しだよ!!

終わらない。

どんなに物を片付けても終わらない。

「師匠……あんたどうやってここまで散らかしたんだよ。」

何かを拾ってみると、その下に二倍の物が落ちているような気がする。

とりあえず分類して一カ所に纏めて置いていたが、全く変わったように見えない。

「はあ………」

疲れた。

窓の外を見る。

日はとっくに沈みきり、辺りは深夜の静かな暗闇に包まれていた。

室内の照明が魔法技術を駆使した淡い光を床に投げかけている。

「……俺の部屋、か。」

もとの世界の俺の部屋はもっと小さかった。

ずっと古かった。

でも、やっぱり懐かしい。

「…帰りたい、なあ。」

自然と言葉が口から漏れた。

「また、割り切ったつもり…か。」

覚悟したはずだった。

マリアさんにもそう宣言したはずだった。

でも、やっぱり寂しい。

この世界のどこを探しても俺を詳しく知る人はいない。

懐かしく想えるものも無い。

覚悟が出来た、割り切った？

そんな事あるわけない。

未練たらたらだ。

ただ、忙しくて。

生き抜くのに必死という状況に立たされて考える暇がなかっただけ。

俺の心はこんなにも弱い。

弱い。

「…片付けよ。」

今は、作業に没頭していたかった。

そうすれば余計な事を頭から締め出せるだろう。

三十分たった。

片付けは未だ終わりが見えない。

しかし…ほとんどの人にはただの汚い屋敷（広さは小屋敷レベルだ。なんせ四階もあることだし。）に見えるだろうが、流石は《三賢者》の部屋って事なんだろう。

貴重な薬品やら素材やら成分が出ること出ること。

平民の経済レベルはよくわからないが、断言してもいい。

四階の一部屋を中身ごとあげるだけで普通の人なら一生遊んで暮らせる。

だって、《火炎竜の鮮血》とか普通に転がってるんだぞ？

どう考えてもそれ物語の終盤に出てくるべきもんだろ。

薬品商なんかが見たら宝の山だと飛び上がるだろうな。

俺も飛び上がりかけたし。

しかし…貴重な薬品やら素材をみてたらだんだんテンション上がってきたなあ。

って、お？

「うひょうー！」

妙な叫びは勘弁して欲しい。

あらゆるグレードの風邪薬の群れを追いやると、そこに現れたのはとある植物の幹から抽出した貴重な成分だった。

人里離れた辺境、大砂漠の洞窟にのみひっそりと生える幻の木を見つけないければ手に入らない超高級品。

ある種の悪質な熱病に対して多大な解熱効果をもつ。

この抽出成分のみが大きな効果をもたらす難病が数種類あるため、希少性と供給量に比した需要の多さで有り得ない高値がつくのだ。

…しかし、白状すると俺がこの成分、《精霊樹の黄金液》を欲しかった理由は別にある。

ドロリとした蜂蜜色の粘液には僅かな酸味と独特の風味がある。

ムフフフフ、これさえあれば完成するのだ。

俺が山の上にいる時から研究を続けている幻の液体。

その名は《マヨネーズ》！！

…いや、探したんだよなあ。山の上で暇だったからいろんな食べられるものを混ぜ合わせていたら、組み合わせると偶然にもマヨネーズに酷似する味になる成分数種類を見つけてから。

あの偶然は本当に神がかったな。

組み合わせせてみて、あと少し何かが足りないと思って後に師匠の記憶を探って見つけた《精霊樹の黄金液》が《無限靱》に無かったときの絶望は忘れられない。

あの時作った試薬にこの成分を加えれば、《マヨネーズ（完全体）》が完成する…！

楽しみで気分が鰻登りだ。

うむうむ、我ながら現金なものだがまあ悪くはなからう。

さっきまでのシリアスな空気は台無しだけど。

などと考えていると。

「リヨウくん？起きてる？」

あんれ？マリアさんじゃないですか。

とりあえずすぐにドアを開けた。

「おきてますよ。どうぞ入って下さい、散らかってますけど。」

「散らかっているのは仕方がない…あら？でも、結構広くなったわね。」

マジすか。

「片付けの成果でてたのか…自分でやったから気づかなかった。」

「え、ずっと片付けしてたの？」

「なにしていると思ってたんですか？」

「睡眠。」

「……まあ確かに疲れましたけど？まずは片付けないと寝るスペース無いじゃないですか。」

軽く不機嫌に俺。

「頑張ってたのにひどいですよ。」

しかし相手もさるもので…

「ふふふ、ごめんなさいね。とりあえず夜食にと思って持ってきた

「んだけど、食べる？」

と、どこからか美味しそうなパンを取り出すマリアさん。

…この人には一生かなう気がしないんだが。

ありがたくパンをいただきながら実感したのだった。

今代〈三賢者〉の朝（前書き）

感想、御意見等お待ちしておりますので宜しくお願いします。

今代《三賢者》の朝

「リヨウくん」

ユサユサ

「朝よ。ご飯の時間よ。」

体を揺すられているのを感じた。

まだ眠いんだけどなあ

「ほら、おきなさいな。」

ユサユサ、ユサユサ。

…どっちにしろこんな状態じゃ寝てられないか。

俺は諦めて半分くらい目を開くと、俺の肩を揺するマリアさんと言った。

「……………まだ寝ます。」

「宣言？」

訂正、諦めたどころじゃ無かった。

「リヨウくん、朝ご飯の時間なのよ。この《智の塔》に住んでる人間は朝ご飯と一緒に食べるって決まってるわ。」

「……なんすかそのルール。」

「私が決めたの。四百年くらい前に。」

スケールでけえ。」

などと、頭の中で突っ込んでみても眠気は晴れず。

「……おやすみな、さ……」

再び目を閉じた。

「もう。仕方無いわね。」

あ、諦めてくれるのかあ。

明日からはちゃんと起きますよ〜。

そう（心の中で）つぶやいた俺は本格的に二度寝に入ろうとし……

「仕方無いから……ここにあるビンに入った水かけちゃうよ?」

……ビンに入った水?

あれ、そんなの置いてあったか?

えーっと、確か昨日寝る前はこの辺りにあった薬品の整理をして、そのまま寝ちまったんだよね……

ビンに入ってる透明な液体…

！！！！

「ちよっ！まつ！ストップ！マリアさんストップ！起きます！起きますから！」

「きゃあ！？…もう、急に叫ばないでよ…。」

「…これが叫ばずにいられますか。そのビンに入ってるのって《邪牙蛇の神経毒》ですよ。身体にかかるだけならともかく、間違っても入るうものなら…」

「なら？」

「…全身の粘膜と目、鼻、口、耳、毛穴から血がにじみ出て、数時間地獄の苦痛にのたうち回って絶叫しながら死にます。」

「…なんでそんな危ないものが普通に置いてあるのよ。」

「いや、その…。師匠が飾ってたみたいです。透明で虹色に光って綺麗だろって…」

「……………」

二人で黙ってしまった。

「…まあいいわ。とにかくご飯だから、下の共用リビングに来なさいね。」

そう告げたマリアさんは、震える手でピンを元の場所に戻すと足早に……というかダッシュで去っていった。

……あなたでも怖いものは怖いんですね。

朝から心臓に負担をかけた俺は、適当に髪を整えるとそのあとを追ったのだった。

三階にある共用リビングに向かうと、一番広い部屋にある大きめのテーブルには見知らぬ青年が座っていた。

「やあ、おはよう！」

輝くような笑顔と共に言う。

何だろう、爽やか過ぎて怖い。

「……おはようございます。」

とりあえず返答。

てか誰だよ。

「キミがアズマ君だね。僕はジャスティス・ブレイブ。この塔に住む《謀賢者》だ。よろしく。」

「……リヨウ・アズマです、何とか賢者ってのは決まっています。ど

「ぞよろしく。」

名前が正義と勇気かよ…何という主人公ネーム。

「ジャス、初対面だからってネコ被るの止めなさい。すぐに分かってちやうわよ。」

マリアさん登場。

…え？あのキャラって偽装なの？

「はははは。な、何を言うんですかマリアさん。ネコ被ってなんていみゃ…いませんよ。」

あ、動揺してる。

必死の弁明だったが、マリアさんは相変わらず白い目を向け続ける。

ジャスティン青年のイケメンフェイスに汗が浮かび始め…

「あーもー分かったよ！普通にすりゃーいんだろマリアの婆さんよ
お！…！」

ギャップでかつ！

どんだけ厚いネコ被ってたんだ！？

いやそれよりマリアさんが…

にっこりと笑ったマリアさんが俺に顔を向けた。

「あらあら。リョウくん？さっきのお薬、《邪牙蛇の神経毒》だったかしら？…まだあるわよね？」

「の、残っておりますです、はい！」

「今くれる？」

「はっ！」

俺は肌身はなさず持っている《無限鞆》に手を突っ込んだ。この《無限鞆》だが、昨日初めて部屋に入ったらこの塔の部屋とも自動連結された。

…どう考えても普通の代物じゃないなこの鞆。

「え、ちょっとまって！なんだその物騒な名前の薬品！おいこらお前もホントに出すな！や、ちよっ、やめー！」

可哀想に……

いや、自業自得か。

《三賢者》（前書き）

一応、この話で第一部終了となります。

ここまで読んでくれた皆さん、本当にありがとうございます。
今日中に二部に突入できるかな？

あ、感想、意見等も引き続きよろしくお願いします。

《三賢者》

「し、死ぬかと思った…。」

肩で息をしながら怯えた目でマリアさんをつかがうジャスティス青年。

どんだけ怖いんだよ。

当のマリアさんと言えば、奥の厨房から皿に盛られた朝食を運び込んでいる。

ちなみに、俺も手伝っている。

しかしこの世界に来て初めてだな、まともな料理食べるの。

早く食べたくて仕方が無い。

「マリアさん、これで最後ですよね？」

「ん…そうね。あとはパンだけ持っていくからまって。」

「ういっす。」

大きめな高級品のオーラ漂うテーブルにつくと、正面に座るジャスティス青年が目に入った。

しかし…整った顔だなあ。

柔らかかそうな輝く金髪に一点の曇りも無い白い肌、彫刻のような完璧な顔立ち……あれ？何だろう、何か殺意が…

「あ？何見てんだお前？」

がつつり睨まれた。

「いや、別に…」

ちよつと呪つてただけだが。

「お前は俺の後から来た、いわば後輩なんだからよお？あんまり調子のんなよオラ。」

「はあ、別にそんなつもりもありませんけど…気をつけましょう。」

と、いいつつも右手は《無限鞆》から取り出した《邪牙蛇の神経毒》《ビンを振ってみせていたり。

「…ま、まあ、年もあんま違わないみたいだしこれからよろしくな。」

あ、態度が軟化した。

「はいはい、遊んでないで食べるわよ。」

「はい。」

…どう考えても母親と兄弟二人だよな。

そんな事を考えながら黄色い卵料理（だよな？）にかぶりつく。

おお…人の手の入った料理の味だよ。

「マリアのば…姉さん、あいつ何にあんなに感動してんだ？」

「さあ？」

もはや他人の声など耳に入らない。

俺は素晴らしいスピードで料理を平らげていく。

「…おい、あいつ遂に涙浮かべてるぞ。怖っ。」

「…本当にどうしたのかしらね。」

ここまで一心不乱に食事を胃に詰め込んでいた俺だが、とある皿で手が止まった。

「むう。。。」

生野菜のサラダだ。

もちろん好き嫌いではない。

そうではなく…

「味付けが塩かよ…」

食えなくはない、しかし、俺の手には先日完成した秘密兵器が実戦

投入を待ちわびていた。

俺は《無限鮑》に手を入れると、慎重に一つのビンを取り出す。

他のビンとは違い、安定性はもちろん、装飾性にも優れた高級品だ。

中には美しい黄緑色の粘体が揺れている。

これこそ現在俺が早くも師匠を超えたと自負する研究分野、《調味料》での現最高傑作。

《コードネーム試薬名称マヨネーズ》！！

……失礼、少し興奮しすぎた。

野菜の上に慎重に垂らして口に含む。

うむ、間違い無くマヨだ。

この作品は料理小説ではありません。ただし、主人公は調味料の再現に全力を注いでいます。

ん？変なナレーションが入ったか？

まあいい。

「んまいんまい。」

と、俺が自家製マヨかけサラダを頬張っていると……

「ねえ、リヨウくんそれ何？」

興味津々といった様子のマリアさんが近づいて来ていた。

ふははは！そうか、気になるか！

「俺の故郷の調味料を再現したものです。食べます？」

と、《無限鞆》の口を開けるが…

「いえ、きみのものを少し貰うわ。」

はい？

マリアさんは何の躊躇いもなく皿に置いたままの俺のフォークを手に取るど。

「むぐ。…（咀嚼中）…んっ。」

食べた。

「マリアさん…それ、俺のフォークつすよ。」

「？嫌だった？」

「いえいえ！嫌なんかじゃありませんが…」

…もしかしてこの人、一度気を許した人間に対しては全くの無防備になるんじゃない…

色々と戦慄した俺だった。

「…リョウくん、やっぱりこれのビンちょうだい。」

「え？そんなに気に入って貰えました？」

「うん、凄いわよこれ。」

「製作者冥利につきますね。どうぞ、作り方は記憶済みなのでお好きだけ。」

ビンを手渡した。

直ぐに自分のサラダにかけ始めるマリアさんとチラチラ様子をうかがうジャスティス青年。

食べ終わったマリアさんには自家製マヨネーズの量産を依頼された。

厨房に置きたいそうである。

…まあ、美人の笑顔も見れたし作ってあげますかね。

こんなにほのぼのしていいのかなあ…

後少しで、俺にとっては何よりも大切な儀式が始まるのに。

昼頃、俺はジャスティス青年とマリアさんと《智の塔》二階の相談

室にいた。

長い会議机の奥側には三個の豪華な椅子が並んでいる。

王や、《三賢者》への相談、嘆願が認められた人間と《三賢者》が会談する場合にはここ相談室で行われる。

相談者側は代表者二名が手前側に並んだ二つの椅子に座り、それ以上いた場合はその後方にまとまった数の椅子がある。左右には《三賢者》を護衛する兵士の席だ。

一方、《三賢者》側は机の奥側に並んだ三つの椅子に座り、相談を受ける賢者が真ん中の椅子に座る。相談者に指名された賢者以外は自由参加であり、左右の席にいたりいなかったりするとか。

とにかくその相談室で俺は今真ん中の席に座っているのだった。

向かいには二人の男。

イデア国王ラインハルト・イデア及びメルクリウス公爵家当主クロノス・メルクリウスである。

ちなみに、左右の兵士席の片方には懐かしき血塗れ騎士のエスカト・何とかがちゃっかり座っていたりする。

あ、手え振ってきた。

「それで、リヨウ・アズマ。」

王様が軽い調子で聞いてくる。

「お前は何か出来て何がしたい？どう生きて何を残したいんだ？」
？《三賢者》になるためのテストみたいなもんか？

そんな風に軽く考えて王様の顔を見る。

息が、止まりそうになった。

王の目は、どこまでも鋭く、どこまでも真剣だった。

…そうだ。

この儀式をもって、俺はようやくこの世界での立位置を持てる。

世界の何者かになれるのだ。

ならば、半端な気持ちは許されまい。

「えーっと…俺が出来るのは薬品の扱いと研究。病人の治療。目標は師匠たる《狂賢者》を超え、彼の研究成果を更にどこまでも発展させていく事。世界中を旅して歩き、新しい発見をし、美人な嫁さん貰って弟子に俺と師匠の全てを伝えたい。」

つたない言葉になってしまったが、それでも俺は真剣に話す。

俺の価値を。

俺の存在を。

「ふむ…。」

王は、しばらく沈思黙考する。

「リヨウ・アズマ。」

「あ、はい。」

先日まで軽く話していたこの男も、やはり一国を背負う王か。

一瞬、気圧された。

「貴殿の知識と技術を認め、その偉大なる頭脳をもって我が国を支え、護り導いて貰える事を期待し、貴殿には《流賢者》の銘を贈ろう。以後、その名が貴殿の立場を保証するだろう。」

「…はい。」

そこで王様は立ち上がって、俺に頭を下げた。

「この国を護る同士として、未永く力をかしてくれ。」

「……微力を尽くしましょう。」

こうして俺は、正式に《三賢者》となり、この世界での立場と家を

得た。

俺は、リヨウ・アズマ。

自由信仰王国《三賢者》が一人。

《流賢者》アズマとなつたのだった。

閑話 or 第二部プロローグ(前書き)

この話は閑話と第二部のプロローグをかねています。有り得ないくらい短いですが…

閑話 or 第二部プロローグ

グツグツ

グツグツ

今、俺の目の前では、紫色のいかにも毒々しい液体が煮込まれている。

隣では、試作品である水色の水薬が攪拌用の魔道具によってゆっくりと混ぜられている。

《流賢者》の銘を拝命してから4ヶ月、俺もここでの生活に大分慣れてきた。

2ヶ月ちょっと前によく四階の片付けが終了。

四階だけでもそこそこの広さがあるし、五階以降は後回しにすることに決めた。

今は、四階のフロアを居住区と研究、実験区に木板で区切って生活している。

ようやく楽しい研究生生活に入る事ができたのだ。

今研究しているのはポーションの改良とソースの再現だ。

ポーションは自由研究、ソースの方はマヨネーズを気に入ったマリ

アさんからの課題だ。

ポーションの方はなかなか難しいのに、ソースの方は順調なのが悲しい。

世に知られている魔法薬のうち最も有名で、誰もが使った事…まで無くとも見た事はあるだろうこの薬を進化させてやろうと思っているのだが…

なかなかどうして難しいものだ。

まあ、まだまだ時間はある。

今はマリアさんとジャス（割と仲良くなった。）に色々常識を教えて貰っていて、ある程度の知識が揃ったら旅にも出たいと思っている。

む、そろそろ昼飯の時間だな。

最近はマリアさんがマヨネーズを使った料理を独学で身につけ始めていて、バリエーションがふえているのだ。

もともとなかなかの腕前である事だし、完成度は高い。

それじゃ、遅れないように行くとしますかね。

《流賢者》の日常

マリアさん作の昼食を食べ終わり、ジャスとマリアさんと雑談をかわす。

なにせ、ここにやってきて4ヶ月だ。歳の近いジャステイスとはかなり仲良くなったし、マリアさんともだいぶ親しくなれた。

…まあ、マリアさんに限れば最初から友好度MAXだった気もするが。

ジャス（本人がこの愛称を許可してくれた。）とは暇な時には一日中無駄話に華を咲かせる事もあるし、マリアさんは俺達二人の母親か年の離れた姉って所だろう。

マリアさんはともかく、ジャスは共用リビングでゴロゴロしている事が多いために実験の結果待ち中の良き話し相手である。

俺みたいに研究好きとかじゃないと《三賢者》って以外と暇な仕事である。

いや、仕事か？

まあ、王国政府から給料…というか生活費が支給されるから仕事かな。

マリアさんとジャスは生活費を、俺の場合は生活費に加えて莫大な額の研究費を貰っている。

ただし、この研究費はある程度の結果を出した場合の奨励金と、研究計画を提出して有用だと認められた場合に降りる特別補助金、毎月自動的に貰える基本研究費の三つを合計した額が貰えるために、毎月ある程度の上下はある。

とはいえ、ボーっとしてても貰える基本研究費だけでもびっくりするような大きな額なので構わないのだが。

そもそもこの間ポーションの改良版、アルティメットポーション 試薬名称を遊びに来た王様に提出した所、城の救護施設への定期出荷を頼まれた。

翌月の研究奨励金の額に目を疑ったのを思い出すなあ。

あれ、普通に過ごすだけなら一生生きてける額だと思つ。

…いや、多少は贅沢をしても問題ないくらいの額だったかもしれない。

ゼロの数の多さに自分でビビってしまい、今までに貯まった金額の総額は見ないようにしている。

あ、ちなみに生活費はジャス共々マリアさんに丸投げである。

…と、まあ俺の財布事情はさておき。

「？メルクリウス公爵家に？」

「ええ、何でも《流賢者》殿にゼウラスくんの経過を見て欲しいそうよ。…もともと病弱気味の子だったから、定期的に様子を見てあげて欲しいみたいね。」

マリアさんが昼飯のマヨネーズ練パンを頬張りながら俺をみる。

うん、かわいいなこの人。

まあ俺より数百年単位で年上の人を口説くつもりはないけど、何とか動作の一つ一つにのんびりした小動物を思わせる可愛らしさがある。

「…………今へんな事考えなかつた？」

「いえ別に。わかりました、メルクリウス公爵家に向かおうと思えますけど…………いつ頃行けばいいですかね？」

「うん。まあ、基本的にはいつでもいいと思うわよ。こっちが向く訳だしね。」

「そうですね。んじゃ、食べ終わったら行ってみま…………おいジャス、それは俺の肉だ。」

「ちっ！」

「お前は基本寝てばかりだろ。研究に頭使ってる俺の栄養を盗るな。」

「ああ？てめツ！人を駄目な子扱いしてんじゃねーよ！大体だな……………」

「……………」

ジャストの不毛な争いに打ち勝ち、満足感に溢れて昼食を終えた俺は宣言通りメルクリウス公爵家にやってきていた。

既に何度かお邪魔しているために屋敷の大体の構造は把握している。

転移の間に出現した俺は勝手知ったる足取りで目的地にむかった。

当然、目的地と言うのは屋敷でも奥の方に位置するメルクリウス家長男、ゼウラス・メルクリウスの部屋である。

数分でたどり着き、ノックする。

「はい。」

「ども、《流賢者》ことアズマです。」

「ああ、先生でしたか。どうぞ。」

許可を貰い、部屋に上がりこむ。

「つかゼウラスくんよ、先生は止めてくれんかね？背中が痒くなるんだが。」

「いえ、僕にとっては命の恩人の先生ですので。」

「…頑固だねえ、君も。ま、いいか。呼び方なんか君の自由だ。さてさて、早速健康状態みるから。脱ぎ。」

「あ、はい。宜しく願います。」

俺が師匠から受け継いだ精神変換は大別すると通常、特化の二種類ある。

だが、細かく分ける場合には無数のバリエーションが存在する。

単純な精神変換のレベルから、特定の能力に超特化したものなどに別れているのだ。

精神変換にレベルという段階があるのは感情を凍結するリスクを最小限に抑えるためだろうな。

俺が今までに使っているのは通常の感情凍結変換レベル2、ちなみに、最大レベルは8だ。レベル5からノーリターン、つまり感情の解凍、再起動が失敗するリスクが生じ、レベル8を使用した場合には感情凍結ではなく感情削除となる。

と、まあ、普段の健康診断くらいでいちいちそんなリスクを背負うのも嫌なので、健康状態を診るだけの時は観察及び異常の発見に役立つ記憶のみの再生をしている。

この《精神変換：診断バージョン》は必要な感情凍結が少なく済むため、お手軽に使う事ができるのだ。

「んじゃ、始めるよん。」

感情がある程度残っているために口調も軽いままだったりする。

ゼウラスくんの頭の天辺から足の先までスキャンするようにゆっくりと視線を下ろしていく。

頭部、脳の活動異常無し。

首、胸部診断中、骨格診断中、胸部重要臓器診断中。

全て予想内の異常値、緊急性無し、治療経過良好と判断。

下腹部、内部臓器、腕部、脚部全て予想内の異常値。

魔力循環良好、魔力形質の異常も皆無、全身のパターンから精神疾患も正常と判断。

精査完了、予想範囲内の残存異常以外の異常は検出されず。

健康状態と判断。

精神変換を終了します。

「……………ふう。よっしゃ、今のところ体に問題は無し。ちょっと病弱気味な以外はいたって健康だな。」

「そうですか、良かったです。」

「ホントだよ。これで君がまた倒れたりしたらクロノスさんに絞められちゃうもの、俺。」

「絞められちゃうんですか？」

「そう、キユッと。ってまあそんな話はどーでもいい。帰るぞ俺は。」

「？何かあるんですか？」

「特にないが、研究を進めようかと。」

「特に無いならもう少ししません？立場が立場なので、楽に話せる人があんまりいないですよ。僕。」

「あ？それはなんだ？俺には気を使わなくていいって事か？地位的には俺のが上だぞおい。」

「いやいやそういう事じゃなくて、え、ちょ、何するんですか？何ですその薬品！？」

「一週間前に試作完成した拷問用強制薬《モスキートver.2》だけど。皮膚に垂らすと蚊に刺された時に感じる痒みと同種の痒みを蚊の五十倍で感じさせる優れものさ。」

「なんて凶悪なモノ作ってるんですか！？ショック死しそうなレベルじゃないですか！？」

「ああ、それは大丈夫。昨日実際に臨床試験したから。」

「誰が被験者引き受けてくれたんですソレ！？」

「いや、城に持ってって王様に見せたら面白そうだってんで報酬つきで実験の志願者募集してくれてな。選抜された我慢強い兵士にビン丸ごと一本ぶっかけたら転げ回って苦しんだ。死ななかつたぞ、彼。」

「更に不安になりましたよ！…え、そのあとどうなったんです？」

「王様は大爆笑してたけど、見物してたクロノスさんに取り上げられて城の地下倉庫に封印された。なんでも、師匠の《狂賢者》が作った危ない薬品を封印してある部屋らしいんだけどな。全く、師匠の作った初代の改良版として非常に秀逸な出来だと思つたにな。」

「……師弟共々何してるんですかあなた達は。え？あれ？じゃあ何で今持つてるんです？」

「複製した。」

「あっさりー！や、ま、ピン近付けないで下さ…わー！..！」

いや、楽しいねえ。

「じゃあな。」

「さ、さようなら。」

ぐったりしているゼウラスくんを尻目に機嫌良く廊下に出る。

「うお、もう暗いな。」

急いで帰る事にする。

いやしかし面白かったな。

ん？本当に薬かけたのかった？

ご想像にお任せしよう。

上機嫌のまま、今度はver.3を開発しようと考えていると…

「あ？…ありやこの前の。」

庭園の隅に、月光に照らされた人影が見えた。

暗く遠いがあのも神秘的で美しい姿は間違えようがない。

前は、いつの間にか消えていたが…

「こつちに来る……。」

段々と近づく影。

十メートルくらい前までやってきたその姿は……

夜風に揺れる漆黒の絹髪。

頭部左右にある不思議な角。

こちらを見据えた瞳は黄金に輝き。

月光に青白い肌が光っていた。

月の女神が舞い降りたかのように神秘的で、人間離れた途方もな

い美しさをもつ女性だった。

俺がフリーズしなかったのはクロノスさんに彼女の事を聞いた事があつたからだ。

そつでもなきや、本当に女神かなんかかと思つたのかもしれないなかつた。

「…あー、シロナルージュ・メルクリウスさん？」

「……………」

返事は無し、か。

「どーも、《流賢者》アズマです。よろしく。」

「……………」

やはり無言、しばらく俺の顔を眺めていたようだが、スツと身を翻すと歩み去っていった。

あー、緊張した。

てか何で無視？

夜空の月が優しく照らす縁側で、俺は一人首を傾げたのだった。

《流賢者》の研究風景

「あ？お前が気持ち悪かったからじゃねーの？」

「…うん、お前に相談した俺がバカだった。ごめんな、難しい事言つて。」

「んだとオ！てめツ！この俺のどの辺が馬鹿野郎だア！」

「お前キレると完全にただの不良だな。あと馬鹿野郎まで言つてないから。…思つてたけど。」

メルクリウス公爵邸から《智の塔》に帰つて来た俺は、相変わらず暇そうにリビングでゴロゴロしていたジャスに相談を持ちかけた。

内容は当然、帰り際に出会ったメルクリウス公爵家長女、シロナル―ジュ・メルクリウスとの初対面の事である。

「フーかよオ、何でんなコト気にしてんだよ？無視されたならこつちもしてやりやあいいだろが。」

「俺はなるべく敵を作りたく無いの。まあ、一回無視されたくらいであんまり気にするのも我ながらどうかと思うが…あんな美人に敵認識されたりしたら怖いだろ。」

「あア？美人と怖さに何の…あア、確かにあの美貌なら味方も多かるつな。」

「そーゆーことだ。ま、一番の理由はそれだが、俺個人としても美人が敵つてのはどうもな。」

「あア、それもそうか。ま、俺としては人間以外は対象外だし敵視されたところで何の問題もねエ、いつも通り悠々としてるけどな。」

「お前の守備範囲はともかくとして、彼女のファンに敵視されんのは問題だろ。何の問題も、つてことは無い。」

「はん、カンケーねーな。だって俺《三賢者》だし。俺のが偉いからな。」

「……そりゃまあ実質的に俺達より高い立場にいるのは王様くらいのもんだしな。一応正式には王様すら対等だし。」

「題目上では対等だろオが実質的に俺らに飯食わせてんのは王だ。養つてる側と養わ れてる側の差はでかいだろ。一応、俺達も知識と技術は提供してるが…目に見えるもんじゃねエ。」

「…あれおかしいな、ジャスが賢者に見える。」

「だアから…ケンカ売ってんのかためエはア!！」

「とりあえず、臨機応変になるべく仲良くするようにするか。…結局それに落ちつくんだよな。」

「おめでとオ。また一つ賢くなれたなア？」

「なぜに上から目線?…でもま、大した美人さんだったなああれは。」

「フン、シロナルージュ・メルクリウスと言えば王国トップクラスの美姫としても名高いからな。」

「へえ、そりやまた…ん？美姫としてもってなんだ。もって。」

「剣の腕も有名だからな。」

何そのチートキャラ。

「…俺、絶対敵にしないようにしよう。」

「そのほうが長生きできるだろ。」

それはさておき。

「…ジャス、お前どんどん口が悪くなっくな。」

「ああ？…今の俺は眠いんだよ。自然、機嫌も悪くなるし口調も荒くなるにきまつてんだろオ。」

「いや、そうじゃなくて。初めて会ったときの爽やか好青年はどこにぶっ飛んだんだよ。」

「あれはこの塔の外で主に使う顔だ。だいたい、一回普通の口調で話したらも才変える必要ねエだろが。」

「いや、それにしてもどんどん悪化していくのが聞いてて面白いんだよ。」

「勝手に遊ぶんじゃないねエ！……まア言うだけ無駄か。」

無駄だな。

「ハントツ！俺はもう寝るぜ。じゃあな。」

「おー。お休みー。」

ジャスは、ひらひらと手をふりながら自分の部屋に消えていった。

俺はそれを横目で見送ると、豪華なソファーに沈みこむ。

「まあ、あんまり気にする事もないか。」

「……………ん、あ？」

目が覚めた。

辺りにはうつすらと朝日が差し込んでいる。

「……ああ、朝か。」

ぼんやりと呟くが、当然返事はない。

自分の部屋じゃない。昨日はあのままりビングのソファーで寝てしまったようだった。

耳をすませても誰かが起きている気配はない。

もう一寝入りしようかとも思ったが、それには目が冴えすぎている。

「うん。研究に戻るか。」

特にやることもないし、王様に頼まれて製作中の魔法薬、仮称《ポーション?》の開発も最終段階だったしな。

せつかくなので、研究の時間に使う事にしよう。

ソファーで丸くなっていた俺はそのそと起き出し、自室への階段を登る。

鍵を解除し扉を開くと…

「……夢みてんのか？」

真っ白だった。

煙で。

「…おいおい、火事とか止めてくれよ。爆発物だらけの部屋なんぞぞ。」

呆然である。

まあ、とりあえず部屋を進んでみる。

特に熱くはないため、火事では無いのだと思うが…

しかしこの煙、不思議な事に不快感が全くない。

むしろ清浄な空気の中にいるかのようだ。

何なんだ一体。

「っと、これか原因は。」

実験区のフラスコの一つから、モクモクと煙が上がっていた。

このフラスコは…えーっと…

…何を入れたんだったか。

あ、貼り紙してあった。

え？《ポーシヨン？》？

………

……

…

いや待て何があったら回復薬からモクモクするんだ！？

何と何が反応した！？

思い当たるのは…あ、多分あれだ。

だとすると回復性能に変化は無いはずだ。

……もしかして。

これ、回復効果のある煙ってことか？

だから不快感なんぞあるわけないし、あんな所で変な姿勢で寝たが体も痛くなかった…

あれ、以外と便利じゃないか？

既存のポーションの回復力を上げるのを目標にしていたが、これはこれで使える。

つてか個人的には新しい反応が見つかって研究したくてたまらないんだが。

…仕方がない、王様に提供する課題は既存のポーションの上位版である仮称《ポーション1.5》でいいや。本当はただの改良版である《1.5》じゃなくて、技術的に全く新しい《?》を提出したかったんだけどなあ。

その《?》の実物がモクモク状態だし、何より今は研究が優先だっ！

俺は近くにあったメモ用紙に一文だけ記すと、リビングに放り込んで部屋の扉を閉めた。

さてさて、研究の時間だ。

「あら？何かしらこれ？」

ピラリ。

「メモ？リョウくんの字よねこれ。『研究に没頭します、探さないで下さい。』って…相変わらず師匠譲りの変人ぐあいね。」

朝食の準備のために起きてきたマリアは、リョウの部屋につながる階段を見た。

そのまま、クスリと笑う。

「…頑張つてね。《狂賢者》のお弟子さん。」

あー、頭痛い。

なんかぼんやりする。

研究のために部屋にこもって…どのくらいたつたんだ？

うう、自作栄養ドリンクの飲み過ぎで口の中がやたらと苦い。

だがまあ無理してまで研究しただけのことはあったな。

たまたま発見したこの発煙物質…他の成分との親和性が非常に高い。
うまく使えば色々なものが作れるだろう。

ふふふ。

ふははは。

はははははは！

俺は何か凄いものを作ってやるぜ！

疲れている時特有の妙なハイテンションで俺は笑い続けたのだった。

この世界で出来た友人とのんびり過ごす穏やかな日常を脅かす、変化がせまっている中で……

〈流賢者〉の研究風景（後書き）

煽っておいてすいませんが、しばらく改稿作業に入ろうかと思えます。…途中で飽きて更新に戻る可能性大ですが。

どなたが作者のモチベーションのために感想をくれる方はおりませんかのう…

話を作る参考になつてとてもありがたいんですが…

お知らせ

えー、突然で申し訳ないのですが、連載を休止しようと思えます。

1ヶ月程の期間連載を続けたこの作品ですが、初めての連載であり、プロットも設定も無しに始めたために自分でも訳が分からん話となつてしまいました。

かわりに、可能であれば新連載を始めたいと思っておりますが今度はしっかり準備したいのでしばらく間が空く可能性が高いです。

もし、このまま「けんつく」（賢者を継ぐもの…のはず略）を続けてくれ、という方が最低数人程度いらっしゃる場合は連載継続の方向でも考えたいと思います。

ここまで拙作を読んで頂いた皆様、本当にありがとうございます。

… 作者はチキンなので、感想やメッセージでの過剰な批判は勘弁して下さい。

今までそんな事無かったので大丈夫だとは思いますが一応念のため。

では、もし次作が出来たらお会いしましょう。

ソロンよ！私は帰ってきた！！

えー、休載宣言した次の日に復活宣言する作者フラフラでございます。

…マジですいませんでした。（土下座）

このような拙作でも楽しみにしてくださる読者がいてくださる事を実感しました。

勢いで書いていたこの「けんづく」ですが、今までに書いた設定をまとめて軌道修正しつつ続けていこうと思います。

ただ、現在構想中のストーリー上我らがリョウ君もある程度の戦闘能力を持つ可能性があります。

…まあ、彼がまともな戦闘を行う訳がありませんが。

これからも、フラフラしがちな作者と本人は否定するだろう無自覚変人のリョウ君をよろしくお願いします。

…プロット無い事に驚かれた方、ええ、話に行き詰まった作者があれ、そもそもこの話プロット無いじゃん、と気づいた時が一番驚きましたとも。

ps、皆さんの感想、本当に参考になるので是非ともたびたび書いていただけると嬉しいです。時間があれば活動報告なんかで返事を書きたいのですが…迷惑ですかね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7810x/>

賢者を継ぐもの...のはず。

2011年11月23日12時48分発行